

TOHOKU DE, SIGN



東北、
東北で、
デザインする
ということ。

続・東北デ、東北で、デザインするということ

東北デ、編集部

TOHOKU DE,

鈍臭いけど、あったかい。適度にアホで、程々マジメ。

鈍臭いけど、
あつたかい。
適度にアホで、
程々マジメ。

まだまだ続く、鈍臭いけど、あったかい、
適度にアホで、程々マジメな、東北のデザインに出会う旅。

「地域」とは？ 「地方」とは？ 「地方のデザイン」とは？ そして、『東北』という「地域・地方のデザイン」とは？

「地域デザイン」、「ローカルのデザイン」「地域×クリエイティブ」など、さまざまメデアで、このような言葉が謳われるようになって久しい昨今。デザイン、そして、デザイナーという存在について、今一度語り直される場面が増えてきたように思います。

『東北デ、く東北で、デザインするということ』は、秋田でデザインを生業にする澁谷和之氏（澁谷デザイン事務所）が中心となり、東北のカルチャーを見つめ直す「東北スタンダード（株式会社金入）」のチームとともに、東北6県に根付いて生きるデザイナーに会いに行くことにはじまった、旅のようなプロジェクト。

土の匂いをするような、人間らしく逞しい、東北に深く根付いたデザインとの出会いを求め、2019年の冬にその産声を上げ、早5年以上もの月日が経ちました。

そして、昨年2024年には、そんな『東北デ』の活動の軌跡をまとめた一冊が完成。わたしたちが感じたこと、疑問に思ったことを、素直に「手記」として書き記しました。

本著は、その後も続く『東北デ、』という研鑽の場を、しつこく追いかけた続編の一冊です。これからも泥臭く続いていくであろう『東北デ、』プロジェクトの旅路の途中として、ますます一緒に思いを巡らせていただけたら幸いです。

東北デ、編集部



目次

2	まえがき 「東北デ」編集部
4	Topic ① 続く『東北デ、』2024-2025
8	青森デ、 豊川茅（下ヨカワイラスト研究室）
18	秋田デ、 後藤仁（コロラポラトリー）
28	山形デ、 富樫シゲトモ（羽越のデザイン企業組合）
40	岩手デ、 スズキケンイチ
50	宮城デ、 伊藤典博（合同会社スカイスター） （仙台青葉学院大学短期大学）
60	福島デ、 小池晶子（手作業）
72	Topic ② 『東北デ、』公開デザイン討論会 レポート
74	Topic ② 【第①部】『東北デ、』公開デザイン討論会
102	Topic ② 【第②部】『東北デ、』公開デザイン討論会
128	Topic ③ 『東北デ、』公開デザイン討論会を 終えての考察 柳澤龍（合同会社運動）
134	あとがき 澁谷和之（澁谷デザイン事務所）

Topic ①
続く
『東北デ、』

2024-2025

鈍臭いけど、あったかい。
適度にアホで、程々マジメ。

もう一步、続く『東北デ、』

東北、

東北で、
デザインする
ということ。

『東北デ、』のプロジェクトマークは、「東北」の地に「デザイン(デ)」を見出すこと、そして、日本というひとつの丸(日の丸)を細分化し、「東北」という土地の輪郭・存在をメッセージすることをイメージしてデザインされた。

2019〜2024年

2019年の冬、秋田のデザイナー・澁谷和之氏(澁谷デザイン事務所)が、地元秋田に帰郷して10周年を記念した展示会『秋田デ、』秋田で、デザインするということ』を、秋田のギャラリー・コアラポラトリーで開催。同時に10周年記念の書籍『秋田デ、』を発刊する。

東北スタンダードマーケット(株式会社金入)では、澁谷氏が秋田でデザインに関わった商品を元々取り扱っていたご縁もあり、仙台への巡回展として『東北デ、』東北で、デザインするということ』を開催することに至る。

そして、2020年には、秋田に続いて、山形のデザイナー・吉野敏充氏(吉野敏充デザイン事務所)も自身の10周年を記念し、『東北デ、』vol.2『山形篇』を開催する。

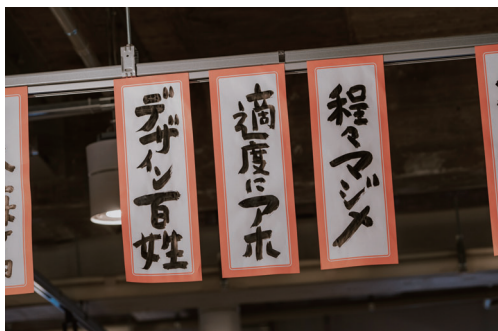
その後、コロナの影響もあり、2年間ほど足踏みするも、2022年には、福島県のデザイナー・高木市之助氏(高木デザイン事務所)と西山里佳氏(hart 株式会社)のふたりの共同参加で、『東北デ、』vol.3『福島篇』が開催されることになる。

そうして、地味ながらも、楽しみながら手づくりでつないできた『東北デ、』の活動は、あるご縁から**2024年は東北経済産業局の調査事業**として、岩手のデザイナー・阿部拓也氏(のはら)、青森のデザイナー・佐々木遊氏(アソビス)、そして、宮城のデザイナー・横塚明日美氏(合同会社 hewa)の3人に出会い、東北6県のデザイナーが、ここに出揃うことになる。

2024〜2025年

こうして、2019年から東北6県を一周した『東北デ、』は、このご縁の先にまだ何か新たな出会いが待っているのではないかと、さらにもう一周、東北6県のデザイナーを巡る旅へと出る。

ということ、本著『続・東北デ、』東北で、デザインするということ』では、2024年〜2025年の間に新たに出会った6名のデザイナーをご紹介しますとともに、公開デザイン討論会(日本海篇&太平洋篇)で語られた、「東北のデザイン」の実状に迫りたいと思う。



← 2019年〜2024年に出会った7名のデザイナーのプロフィールは次ページにて



2024年2月、仙台FORUSに勢揃いした『東北デ、』のデザイナー

※詳しくは、2024年に発行された書籍(右QR)をご覧ください

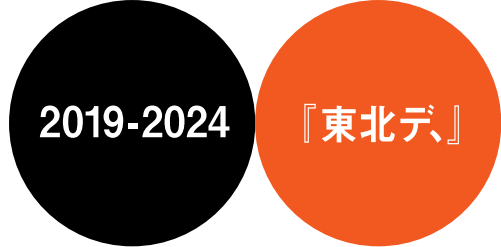




『東北デ、』公開デザイン討論会～日本海篇～ | 左から、佐々木遊、豊川茅、後藤仁、澁谷和之、吉野敏充、富樫シゲトモ



『東北デ、』公開デザイン討論会～太平洋篇～ | 左から、澁谷和之、伊藤典博、横塚明日美、スズケンイチ、阿部拓也、西山里佳、高木市之助、小池晶子



TOHOKU DE, SIGN MEMBER



秋田 澁谷和之（進行役兼）
秋田県美郷町生まれ。宮城大学事業構想学部デザイン情報学科、建築専攻。卒業後、東京の広告代理店での勤務を経て、2009年に「澁谷デザイン事務所」として独立。近年は「教育×デザイン」をテーマに、「国語・算数・理科・デザイン」というプロジェクトで奮闘中。劇団やったり、郷土玩具作ったり、様々なデザイン活動中。本プロジェクトの発起人。



福島 西山里佳
福島県双葉郡富岡町生まれ。東京にて音楽やアパレル・出版関連のデザイン業務に従事後、福島に帰郷。人々の豊かな生業を「表現する」ことをお手伝いするため、2020年に「3030」を法人化。2021年には南相馬市小高区に、地域にひらかれたデザイン事務所として、事務所兼アトリエベース「一粒」を開所。



宮城 横塚明日美
宮城県丸森町生まれ。広告制作会社に勤務後、フリーのデザイナーを経て2020年に丸森町でデザイン事務所「合同会社 3030」を設立。宮城県仙南地域を中心にデザイン制作からブランディング・企画など幅広く活動しながら、趣味では地域の写真を撮りため展示会や冊子などでもリリース。「あかるくかしこくたくましく」がモットー。



福島 高木市之助
福島県いわき市小名浜生まれ。仙台デザイン専門学校卒業後、東京へ移りデザインとは関係のない仕事を渡り歩く。2010年に福島へ帰郷後は、かまぼこ製造会社にてかまぼこ職人に。その後、2016年に意を決してかまぼこ職人からデザイナーに転身・フリーランスに。「ハッピーな未来につながるデザインをすること」がモットー。



青森 佐々木遊
青森県八戸市生まれ。家族全員デザイナーの家庭に生まれ、「デザイナーにはなりたくない」と悩みもがきながら辿り着いた青森でのデザイン。地元新聞社に入社後「東北のデザイン社」を社内分社しくりエイティブダイレクターに。現在は個人で「アンビズ」を立ち上げ、地域の面白そうなことがもっと面白くなるよう奮闘中。



山形 吉野敏充
山形県新庄市生まれ。東京デザイン専門学校卒業後、SOFI ON DEMAND、SOD at WORKSを経て吉野敏充デザイン事務所を設立。地域広域情報誌「季刊にやー」、山形県の工芸品支援「山から福がおりてくる」、マルシェ「Krikoto Marche」、新庄の食プロジェクト「新庄いいにゃ風土」など「デザイン事務所」の範疇を超えた取り組みを数々行っている。



岩手 阿部拓也
秋田県由利本荘市生まれ。仙台の専門学校を卒業後、大手印刷会社を経て2018年に独立。コロナ禍をきっかけに岩手県遠野市に移住。地元企業や個人商店・農家などをパートナーにデザインで役に立てることを日々模索中。また、自身の移住生活を漫画にしたり地元の郷土芸能し踊りの舞手になるなど遠野の面白さにとっぴり浸かっている。



*2 野辺地中学校美術部のみんなとのデザインの授業風景。豊川さんみたいな美術・デザインの先生が近くにいる青森の中学生は幸せ者だ。

豊川さん自身、自分の「好き」を育てる最初の土壌のひとつであった美術部という場所。その生徒たちの「好き」や「おもしろい」と思うシンプルな気持ちを、今度は育てる立場にもなっている。

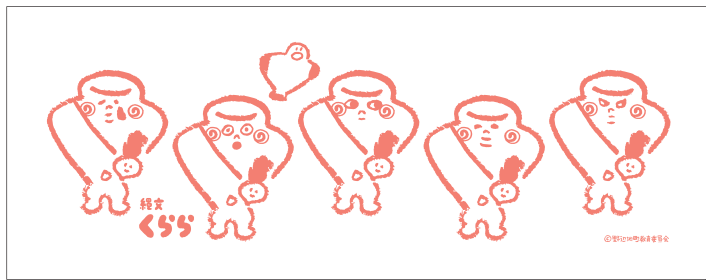
豊川さん自身、自分の「好き」を育てる最初の土壌のひとつであった美術部という場所。その生徒たちの「好き」や「おもしろい」と思うシンプルな気持ちを、今度は育てる立場にもなっている。

んのイラストのファンとなり、縄文に明るい豊川さんにアドバイスを求めたことだった。2019年にはワークショップを通じて手ぬぐいやトートバッグなどのグッズを開発。^{*3} 2021年には短編アニメーションを制作するなど、中学生のアイデアを生かしたさまざまなデザインが生まれている。

つらいデザイン

青森県つがる市にある「神武食堂」のユニフォームのデザインも、縄文好きがきっかけで手がけることになった仕事のひとつだ。豊川さんの展示を見た店主の妻が、直接豊川さんに連絡をしてデザインを依頼したという。ユニフォームに描かれているのは、同市の亀ヶ岡石器時代遺跡から出土した遮光器土偶。同店は巨大な遮光器土偶をモチーフにした外壁がインパクト抜群のJR木造駅（P9）のすぐそばにあり、遮光器土偶はシンボリックな存在だ。2024年11月には創業100周年に合わせ、『スーパーラブ♡神武食堂』と題した展示イベントを開催。歴代店主のイラストや、店の歴史や裏話などが展示された。

同展は、豊川さんと、八戸市のグラフィックデザイナー・花田耕助さんでつくったユニット「つらいデザイン」が企画。つらいデザインは、「前向きじゃない」をテーマに、不定期でフリーペーパーやグッズを作ったり、いろんな人の「つらい」を紹介する活動で、励まされ、助長せず、「つらい」を味わうためのデザインとイラスト



*3 「縄文くらら」がモチーフの手ぬぐい。「縄文」というテーマひとつで、さまざまなグッズのデザインが展開していく。



*4 神武食堂 2024年11月20日(水)から 年内開催予定 11:00~19:00(なくなり次第終了) 火曜定休



*4 神武食堂の名物メニュー・担々麺のイラストをメインとした『スーパーラブ♡神武食堂』のフライヤーと店内の様子。



*5 ユニット「つらいデザイン」の相方・花田耕介さん(右)。



つがる市木造-神武食堂店内にて開催 2024年11月上旬スタート予定



*6

デザインをするというときに、一度外に出てみないとわからないこともあるという人もいて、その側面ももちろんあるとは思いますが、ずっとその地域にいる人じゃないとわからないこともあると思うんですよね。

東北ってやっぱり暗い。鉛色でどんよりしている。でもそれを明るくしようというのは気持ちが悪くて、暗いところがいいところなんですよね」と豊川さんは話す。

東北にネガティブな印象があったとして、ポジティブな印象のある他地域のように変えてしまおうとすることは正しいとは言えないだろう。ネガティブとされていることをそのまま受け出すデザインは、人口減少を大前提に物事を考えたり、終わりと区切りを考えたり、『東北デ、』がこれまでの研鑽の場で、度々言葉にしてきた、「あきらめるデザイン」に通じるのかもしれない。



青森デ、

コラム

東北、マジしんどくて好き♡

執筆：澁谷和之（澁谷デザイン事務所） 写真提供：team なんこつ



写真：小山田邦哉



2024年度の『東北デ、』公開デザイン討論会のメインビジュアルと(本誌の表紙にも)なった、一人の農夫のイラスト。あの農夫は一体誰なのだろうか?と疑問に思われた方も多いはず。

『日本民族学の父』とされる柳田國男と、映画監督・写真家の三木茂が、1940年の冬から約1年かけて秋田の農村を練り返し訪れ、書き残した『雪国の民俗』という民俗誌がある。その冒頭の章に最初に登場するのが、縄文時代の環状列石で知られる秋田県鹿角市大湯の、あの農夫である。無精髭を蓄え、なんとも愛想の無い、無骨で何かをあきらめたような寂しげな表情でありながら、一方でどこか静かな喜びのような笑みをも含んだこの農夫の表情には、我々日本人が忘れてはならない、東北という地方に通底する、何か奥深い心情のようなものを感じずにはいられなかった。

「私の活動は、好きなことをやっているだけの、本当にただの『日常』なので、そこに『東北』『青森』『地方』ならではの……みたいな要素が加わることで、自分の活動に特別感が生まれたり、恩着せ

ら、『地域』や『東北』という言葉を取り除いた先のデザインとは?』という問いに、たくましく対峙していけるようにならなくてはいけないと、茅さんの『生活』『日常』というとてもピュアな言葉に、改めて背筋の伸びる思いがした。

ここ最近、もともと首都圏や都市部でデザイナーとして働いていた人材が、デザインの環境や生活状況に疑問を感じ、地方や故郷に逃げるように舞い戻り、デザイナーとして再スタートしようとする場面に遭遇することが増えた。僕が東京から秋田にUターンし、独立した当時2009年頃は、あまりそのような動きは見られなかった頃で、今になってそのようなデザイナーという人材の動きが見られることは、とても良いことだろうと思う一方で、そのデザイナーの意思決定において、地方に対するポジティブな気持ち働いていないようにも感じられる。

そんな地方デザイナーの在り方が問われる印象がある昨今、茅さんは100%青森に生まれ、100%青森の地に育ち、100%青森でイラストを描き続け、デザイナーになり、自ら稼ぎ、今に生きる

がましいものになったらどうしよう……!と思っていたのです」と、自身のインスタグラムで、『東北デ、』のプロジェクトに関わるようになった当時の本音を書いてくれた『東北デ、』公開デザイン討論会へ日本海篇の後の懇親会の席で、「最初の頃、『東北デ、』って、今よく見たり聞いたりする『地域デザイン』とか、『地方ローカルのデザイン』とか、そういうどこか流行りっぽいノリの活動なのかな……?と斜めに見て思ってたんですけど、思ってたよりも、ずっと『生活』とか『日常』の話だったんですね」と、秋田の日本酒をグビグビ呑みながら、どこか安心したように茅さんが言葉にしてくれたことが、僕はとにかくうれしかった。^{*10}

山形県新庄市でデザイナーとして活動している吉野敏充さん(P78)が、日本の大御所デザイナーである原研也さんや梅原真さんらとトークショーに登壇した時の話にもあるように(P78)、「地域をデザインする」ということは、これからの日本を考えていく上では当然のことであって、自分たちのようなデザイナーか

人だ。そこには、「地方でデザインする」だとか、「地域のためにデザインする」というような、どこから借りてきた耳障りの良い言葉が発せられるような隙は無い。しっかりと青森で暮らすことの生き辛さや、不便なこと、どうしようもないことをすべて受け入れた人にしか滲み出せない、純粹な辛さや寂しさの裏返しとしてのバカ馬鹿しさと明るさ、そして強さがある。縄文大好き、ガングロパラパラ、「つらい」デザイン、「スーパーラブ♡地獄」……、東北万歳! 大好きだ。

2014年頃からだろうか、地方創生という言葉が掲げられて以降、コンサルバブルなんて言葉がよく聞かれる日々が続いた。地方をのっぺらぼうにするようなチェーン化したコンサルティング・デザインが蔓延する状況を打破するような、本場の暮らしの上に生きる、パンクな力強さが、茅さんのイラストにはある。

そんな茅さんのイラストを眺めていたら、いよいよ、『雪国の民俗』の冒頭に登場する農夫が、「東北、マジしんどくて好き♡」と、ニンマリと言葉にしているように見えてきた。



青森デ、| 豊川 茅

青森県青森市生まれ。高校時代に美術・デザインを学び、卒業後は洋裁を学ぶ。デザイン会社等の勤務を経て、2016年から「トヨカワイラスト研究室」として活動。“なんとなくハッピー”をテーマに、青森を拠点に県内外のイラスト・デザインを手がける。2023年から“前向きじゃないものづくり”がテーマのユニット「つらいデザイン」をスタート。



*10



豊川さんは、地元のパイセンが結成した「teamなんこつ」というパラパラチームにも属して、地元のお祭りやイベントで、パラパラのパフォーマンスを披露している。中学生の頃からダンスを習い、踊るのが好きな豊川さんだが、「自分に自信がないから、武装というか、メイクをして、鎧をまとって、パラパラしてる感じ」と言う。



*1

秋田市にある「ココラボラトリー」(通称「ココラボ」)では、年数回の自主企画と、さまざまなジャンルや年代のつくり手による展示会や公演などが、ほぼ週替わりで行われている。ココラボは、2005年に秋田県五城目町出身の笹尾千草さん※2により設立されたギャラリーで、2代目の代表を務めているのが後藤仁さんだ。後藤さんは創設メンバーだが、当初はギャラリーのポスターやフライヤーなどを制作するグラフィックデザイナーとして関

創造する楽しさを取り戻す

わっていた。代表を引き継ぐことになったのは2015年。笹尾さんが秋田を離れることになったときである。

「引き継ぐか否か、むちゃくちゃ悩みました。僕はデザイナーとして関わってはいたけれど、基本的には笹尾さんが作ってきた場所だったので、どうすべきか、いろんな人に話を聞きに旅にも出かけました。考えて、考えて、考えて、僕が強烈にこれをやりたいとか、目的があったわけではなかったんですが、秋田にはまだ『ココラボ』という場所が必要だと思っただんです」(後藤さん)。

ココラボができた2005年は、今のようにならぬSNSも普及しておらず、表現する場所が限られていた時世。そんななか、メディアやギャラリー側が選んだものではなく、表現したいと思ったことを誰もが発表できる場所はとても貴重で、秋田に「ココラボ」があったことで救われた人はたくさんいたことだろう。『東北デ、編集部のメンバーで、2009年に東京から秋田県美郷町に帰郷したデザイナー・澁谷和之さん(P75)も、そのひとりだ。*3



*3

『東北デ』の言い出しっぺでもある澁谷さん。今、こうして、秋田や東北で活動できている原点には「ココラボ」があるという。



*2

2005年、秋田市大町に「ココ」(coco)に、「地域」(ここ)、「個人」(個々)、「共同」(co-)という3つの意味を込め、「ココラボラトリー」を開業。

既にあるものを、受け継ぐ



ココラボラトリー
後藤 仁

秋田デ、



*4

澁谷さんと後藤さんが2020年から、毎年年末に企画している、ココラボの恒例デザインイベント『デザイン筋トレ忘年会』の様子。一年間を振り返って、クリエイターが自由に表現の筋トレをする企画だ。写真：高橋 希

「秋田に帰ってきてすぐの頃は、都会にかぶれていた部分もあって、東京の方がオシャレだとか、センスがあるって思っちゃってところもあったんですね。でもココラボには、それさえも超えた正直な楽しさやおもしろさがあって、クリエイティブな場であったことが、うれしかったのを、今でも覚えています」と澁谷さん。^{*4}

上小阿仁村は日本の未来

「あなたがやりたいんだったら正解です」と思っちゃうんです」と、誰しもの創造を尊重する後藤さんは、「人口がどんどん減っていても、一人ひとりの創造性が上がれば、未来はそんなに悲しいものではないと思う」と話す。^{*5} たしかに、失われつつある「創造する楽しさ」を一人ひとりが取り戻したときには、おもしろいと感ずる場所がどこなのか、その価値観は大きく変わることだろう。

後藤さんは、2012年に始まった『かみこあにプロジェクト』の総合ディレクターも務めている。かみこあにプロジェクトは、2025年2月28日現在で、総人口1855人（出典：上小阿仁村住民福祉課）という秋田県上小阿仁村が、少子高齢化や人口減少に立ち向かい、里山の魅力を発信する取り組みで、同村の風土を生かしたアートや音楽が村内で展開される。後藤さんは初回からアーティストとして参加していたが、2019年からは、ディレクターを引き継ぐことになった。



*5



2024/10/06, 13:29

上小阿仁来ました！
入り口でお父さんの作品があるのですが、これもプロジェクトの一環？

『かみこあにプロジェクト（*6）』のあるひとコマ。公式の参加アーティストでもない地元のお父さんが、自分の作品を会場受付横に、勝手に展示していたときの様子。右写真は、この状況を観て疑問に思った、ある一般来場者の方のSNS投稿。後藤さんは、こういった状況や関係性を大事にするデザイナーだ。



*6

2012年から、新潟県の「大地の芸術祭」の飛び地開催としてはじまった、現『かみこあにプロジェクト』。「ただ、ここに、在り続けたい。」は、10年近くこのプロジェクトが大切にしてきたプロジェクトメッセージ。

2023年度プロジェクト メインイメージ 写真：船橋陽馬（根子写真館）



作品を展示してくれるアーティストの方々はもちろん、地元村民の方々、そして、村外から『かみこあにプロジェクト』を盛り上げたいと協力してくれる方々、それぞれの立場の人たちの気持ちを丁寧に汲みながら、プロジェクト全体に編み込み、寄り添う後藤さんが作り出すコミュニティは、静かにも、長く、力強い。



*7

今後、解体される予定となっている「旧かみこあに保育園」。かみこあにプロジェクトが開催されている期間中も、村内外のさまざまな方々から、この場所を残してほしいという声がかかれた。

「大きな規模で短期的にやるよりも、小さくても続いていく方が残るものがあると思っています。ここで暮らす人たちの日常の生活の延長線上に、少しの変化があればいいなと思って」と後藤さん。
第10回目となった2024年は、「小さなかみこあにプロジェクトとして、前年から使われていなかった「旧かみこあに保育園」の1カ所を展示会場とした。

中に入ると息遣いが聞こえてきそうな、まだ体温も呼吸も感じられるその建物は、今後解体される予定だという。土地の記憶が詰まった場所が残ること、なくなること、それが村や町にとってどんな影響を及ぼすのか。自分の生まれ故郷ではどうなっているのだろうか。展示会場の教室や廊下を歩きながら考えさせられる。
「上小阿仁村に来るときは、「未来に通っている」と思うことにしています。ここは日本の各地の未来の姿だと思うんですね。経済的な利益だけでは計れない確かな効果は見えているので、アートの力を社会に伝えていくということは続けていきたいですね」（後藤さん）。
旧かみこあに保育園も、プロジェクトに使われたことでその魅力が再認識された。今あるものの価値に気がつく想像力。後藤さんはそれらを育む場所や機会を受け継ぎ、続けているのだ。
今回の『東北デ、』の取材を通じて、「自分は新しいことをあまりやっていないことに気がついた」と話す後藤さん。秋田



*7

『かみこあにプロジェクト』の実行委員として後藤さんを応援してくれている武石悦子さん。保育園の存続を願う気持ちは、みんな一緒だ。



2024年度 かみこあにプロジェクト メインイメージ。



秋田デ、 コラム

空気みたいな人

執筆：澁谷和之
(澁谷デザイン事務所)

手前左：後藤仁 / 手前右：坪谷奈摘美 / 奥：澁谷和之
写真：伊藤隆宗 (イトウタカムネ写真事務所)

市新屋で開催している、まちと手づくり品を楽しむイベント「ものまちなさんぽ」*⁸も2012年に始まり、2018年から後藤さんが運営を引き継いだものだ。

「ものまちなさんぽ」のメイン会場となる渡辺幸四郎邸の管理を長年行ってきた富野昭雄さんは、後藤さんを陰で支えてくれている。歴史ある建物を守り、秋田公立美術大学の学生に創作の場として開放するなどして、まちの宝を受け継いできた大先輩だ。*⁹

「もう新しいことを作っていくという時代、状態ではなくて、既にあるよいものをより深めていくほうが、これからのクリエイティブで、自分の創造を発揮するのにすごくフィットしているなと思って、なんとなく無意識でやっていたんだと思います」(後藤さん)

「0→1」を作り出す、華やかに見えるデザインに対して、「1」を受け継ぐデザインは地味かもしれない。けれども、自分が暮らしている土地の規模と、時間の流れのなかで必要とされる価値を見極める機会が必要で、日本で少子高齢化率が



*⁸ 「ものまちなさんぽ」のイベント風景。派手ではなく、静かに丁寧に続く、後藤さんらしいイベントの風景。



*⁹ 富野さんと渡辺幸四郎邸前にて。世代を越えて、地域について語り合えることの尊さを実感。



*⁸ 「ものまちなさんぽ」のイベント会場は、もともと秋田市・新屋という地域がもっている歴史や風景の個性をそのままに、デザインし過ぎないバランスを大切にしているように感じる。

最も高い秋田県(2023年時点)で、後藤さんはそれを静かに続けている。

もともと、秋田市の印刷所の工場だった場所をリノベーションし、2005年に立ち上がったギャラリー・ココラボラトリー。その重くて、青いドアを開けて歩入ると、そこにはいつだって、ギャラリーのオーナーとしての後藤仁さんが、はにかんだ笑みを浮かべては迎えてくれる。そして、嫌な顔一つせず（本当は面倒臭いなぁって思っているだろうけど……）、事務所の中からノコノコ出てきては、いつもの定位置に立って、日々悩める我々秋田県民の立ち話に、いつまでも静かに耳を傾けてくれる。

普段、ギャラリーを経営するオーナーという一面をもちつつ、それに加えアーティストという顔も兼ね備えた後藤さん。そんな後藤さんは、青森のデザイナー・豊川茅さん（P8）と同様に、一度も地元を離れたことがないという背景があり、純度100%の秋田に育てられ、形作られた、稀有なバランスの持ち主・デザイナーだと僕は思っている。あくまで、これは個人の認識の範囲の話だが、後藤さんは人の話をすべて聞いてくれるけど、基本

は聞いていない。そして、人のことを否定もしないけど、肯定をすることもほぼない、空気がたいな人だと僕は思う。

そんな後藤さんが今現在、総合デザイナーとして関わっている、『かみこあにプロジェクト』という上小阿仁村で続くアートプロジェクト（芸術祭）がある。これも、あくまで良い意味でだが、「はつきり言って、後藤さんは、総合デザイナーなんてポジションには向いていないんだ」と、僕は思っている。関係者に明確な指示を出し、プロジェクト全体を的確に精査し、スムーズに誘うべき役割を担うのがデザイナーという立ち場であるかもしれないのに対し、後藤さんという人は常に、ぼんやりとした状態のまま、プロジェクトを時間の流れに委ねるかのように見守り、ゆっくりとそのプロジェクトの向かうべきところを探るように誘う人だ。そこには、「デザイナー」や「デザイナー」という言葉に想像される、効率とかわかりやすさとか、スピード感といったイメージは、ほぼ皆無に思われる。

「寛容が必要だ」というようなことが、さまざまな地元メディアで言葉にされる

ことが多くなつた秋田県。少子高齢化率、全国ナンバーワンと言われるようになって久しい、今の秋田県。そのなかでも、もっとも少子高齢化率が高いとされる上小阿仁村にとって、必要な芸術祭のディレクション・デザインとはどういったものなのか？ いわゆる、華やかで、派手で、刺激的で、明るくて、メッセージ性の強いアプローチとしてのデザインが、この村には最適なのだろうか？ と、上小阿仁村にゆっくりと静かに向き合う後藤さんの姿勢を横で見ていると考えさせられるのだ。^{*10}

そして、その一方で、僕が総合デザイナー的な役割を担っている、秋田県立美術館の「みんなのキンビ」プロジェクト（P108）。2023年・2024年度と、このプロジェクトでは、後藤さんにアーティストとして作品展示をお願いした。

2024年度、彼が製作した作品は、秋田のバブル建築の象徴とも言える県立近代美術館が、「キンビオン（P25）」という名のロボット（高さ約4メートルもの造形！）となり、少子高齢化に歯止め効果がない秋田県内各所に、美術・アートを出

前美術館として届けていく……という、壮大な架空の物語を形にした馬鹿げたもの。そして、後藤さんの作品として、何より彼らしかつたところは、企画展初日に「キンビオン」の完成が間に合わず、企画展最終日ギリギリにやっと完成する（完成したのかも不明）……という、完全に時間の流れのままに身を委ねた、完成に至るその在り方だった。普通のデザイナーだったら「開催初日までに間に合わせるしてくれ！」と憤るところかもしれないが、後藤さんのその「間に合わなさ」は、どこか自然で無理がなく、気持ちの良い佇まいで、一応デザイナーを務めている自分も、つい納得をしまっていた。

そんな、デザイナーというポジションが向いていないかもしれない後藤さんと僕は、2025年の夏に開催される予定の『かみこあにプロジェクト』の展示会場に、「キンビオン」が美術の出前出張に飛んでいく……という、無謀な妄想（2024年度内においては実現できるか否かは不明……）にドキドキしながら、秋田という地で「デザイン」を静かに、無責任に、ニヤニヤと楽しんでいる。



秋田デ、| 後藤 仁

秋田県生まれ秋田育ち。ココラボラトリー2代目代表/デザイナー/アーティスト。ギャラリー運営を主軸に、作品制作、イベント企画、ダンス公演への出演など活動の幅は多岐に渡る。2015年～ココラボ代表。2018年～手づくり品市「ものまちさんぽ～」代表。2019年～「かみこあにプロジェクト」総合ディレクター。



*10 秋田で活動する陶芸家・田村一さんの個展のDMは、後藤さんが毎回デザインしているのだが、デザイナー自身（後藤さん）の個性の主張は基本的にゼロの、まさに空気のようなデザインが印象的だ。



*11 2023年度に開催された「みんなのキンビ」プロジェクトの企画展「大根ビネーション」展に出品された後藤さんの作品。「大根」をテーマに、様々なモノとモノの認識の境界線を問う作品は大人気だった。

「三日三晩、ずっとお酒を飲んで酔っ払いながら行われるような祭り、子どもの頃はそれが嫌いだったんですよ。でも進学で上京していったときに、地元に残っている祭り好きの友達から『暇だば出ねがぁ?』って誘われて、軽い気持ちで参加することになって。当日はすごく酔っ払って記憶も失いそうになったんだけど、神輿担いで川さ入るときに、すべての景色が溶け出して、ひとつになったような感覚を味わったんけ。祭りの日って、み

祭りが育んだ郷土愛

鼠ヶ関は山形県鶴岡市にある地区で、新潟県との県境に面している。勿来関、白河関とともに、奥羽三関に数えられる念珠関があった土地だ。

この場所で生まれ育った富樫シゲトモさんが、上京後に故郷に帰ってきたのは2015年のこと。「ダサイ、つまらない、稼げない」というレッテルを自ら貼っていたという田舎に、自らの意思で住むことを決めたのには、祭り(鼠ヶ関の神輿流し)の存在が大きかったという。

んな祭りのことしか考えていないから、意識の集合体みたいなものが生まれだんと思う。その感覚が忘れられなくて。それからこの故郷ってすごい、なんかいいなって思うようさなっただんやの。郷土愛みたいなものが目覚めたのは、そのときだと思います」。

以来参加できるときは祭りに参加していたという富樫さん。鶴岡市温海地域の自然・文化・暮らしを題材にした体験プログラムなどを企画・提供するNPO法人自然体験温海コーディネートが立ち上がり、手伝ってもらえないかという声がかかったタイミングで、山形にUターンした。

「当時、NPO法人は立ち上がっていたのですが、箱はあったんども、中身はこれからだったんで、自分でいろいろできるなということに魅力を感じだんよの。給料は実質1/3さなっただんども、複製が許されていあって、自分で稼げばいいと思っただん、ダサイという部分は、自分次第でどうにでもなると思っただんよの」。



*1

少子高齢化の波により、地域・集落の祭りの継承が難しくなる世の中の流れのなかで、地域の伝統文化とデザイナーとの関係は、とても重要だ。



*2

「ウミのタイケン」と、「モリのタイケン」の2種類を軸に、温海地域独自の自然や文化を体験できるプログラムを2万人に提供している。

型を破り、余白を遊ぶ





*3

図らずも、富樫さんをデザイナーにしちゃった張本人かもしれない、伊藤隆さん(左)。ふたりの関係の間には、行政と民間を感じさせるような境界は感じられない。

人生を変える しなの木の出会い

NPO法人自然体験温海コーディネートで、富樫さんが体験プログラムを企画するにあたり、地域を案内してくれたのが、当時観光振興などを行う鶴岡市産業課に在籍していた伊藤隆さん(現在は鶴岡市温海庁舎総務企画課長)。最初に連れて行ってくれたのが、鶴岡市関川地区で受け継がれてきた「しな織」の材料となる、しなの木の皮剥ぎ体験だった。^{*4}

その後、富樫さんは2019年に「羽越のデザイン企業組合」を立ち上げることになる。関川しな織共同組合や鶴岡市、同市にある慶応義塾大学先端生命科学研究所による共同開発で生まれた、しなの木に咲く花の化粧品を販売するためだ。

「人生を変えるぐらい、衝撃だったけのお。皮剥ぎを初めて目の当たりして、こんだごと、未だにしてる所あらんがあとという気持ちとともに、自分のなかの細胞が反り返るような感覚……、記憶の奥深くにあった箱が空いて、一気にブワーって溢れ出してくるような、とにかく何かが目覚めだんよのお。そんなとき、日本人の遺伝子さ刻みこまれてる文化の力を感じだんけ」。

しな織は古代布とも呼ばれる日本最古の布のひとつで、しなの木から繊維を紡ぎ織る自然布のことだ。関川地区は昭和50年代まで冬は雪に閉ざされ陸の孤島となる豪雪地で、農閑期の副業としてこの地で続けられてきた。



*4

しなの木の皮剥ぎと花摘みの風景。原材料確保の難しさなどの面にも真正面から向き合う、たくましいデザインの姿勢がある。人生を変えるぐらいの衝撃だったという、言葉にはできないような、東北が守るべき文化がここにある。



*5

「羽越のデザイン企業組合」のメンバーのひとり、五十嵐丈さん。日本三大古布のひとつである「しな織」の里・鶴岡市関川出身。



*2

NPO法人自然体験温海コーディネートのスタッフとして、生き生きと地元で暮らしている富樫さんの言葉はとにかく今を感じ、今を次世代に渡そうとしている意志を感じた。

写真：五十嵐丈

「アホじゃないですか(笑)、境目で反復横跳びをするんですよ、大人が。すべてが衝撃。すごくワクワクしてるし、今まで生きてきた世界には、そういう生き方をしている人っていなかったんです。会社員になってデスクワークするか、医者や先生になるという選択肢しか見えていなかった。富樫さんは、こういう生き方もあるんだ、これでも生きていけるんだって、思わせてくれました」と渡会さんは笑う。

そんな富樫さんだが、すでにロールモデルにはなっているようだ。富樫さんの企画するイベントなどにスタッフとして参加する山形大学在学の渡会日菜さん(2024年度に卒業)は、新潟県と山形県の境目で叫びながら、反復横跳びをする大会を開催する富樫さんを見て、「おもしろい大人がいる」と思ったという。「端っこは境目ではなく、交流の真ん中なんだ」という想いから、富樫さんが発案したイベントで、「世界境目で反復横跳び協会」も設立し、世界中で大会が開催されることを目論んでいる。



「境目で反復横跳び世界大会 in 羽越」の様子はこちらから



*6

しな織で作られた、そのまま土にも還るというテディベア。当然のことだが、見た目はとてもカワイイけど、そのお値段は、決してカワイくない(笑汗)。

「社名にデザインという言葉がついでらんども、私たちのデザイン活動は、グラフィックデザインをするのではなく、地域をよくするごごだんよのお。よくするとは、先人達が積み重ねてくれたことを尊重し、今というアクセントを加えるごごだどと思う。*6。しなの木や花を用いた製品を手掛けてますが、自社ブランドのプロダクトデザインをするときだけではなく、

依頼されただ仕事に対しても、そのごごを意識して、常に取り組んでいます」。

反復横跳びで世界を変える！

富樫さんはまた、鶴岡市で活動を続けていくロールモデルとなると、自身で貼っていた「ダサイ、つまらない、稼げない」という田舎で働くことへのレッテルを払拭したいと考えている。

「物質的に裕福でなくてもぜんぜんいい。現代で生活できるレベルの収入があったうえで、自然とともに生きる暮らしが理想だのお。私がデザインで大事だと思っているごごは、無駄を愉しむごごだんや。やらなきゃやらないでいいし、いらなくもしれない。そうした余白に対してどう表現するかがおもしろさであって、それは絶対的に心が豊かじゃねえばできね事だがら、常にそういう状態でありてのお」。



*6

その一つひとつが、シナノキという素材のすべてを無駄にしないように開発された商品の数々。そこには、地域の価値を次に繋ごうとする、富樫さんの想いを感じる。



関川しな織協働組合の五十嵐茂久さん(中央)と、関川地区の自治会長である五十嵐利幸さん(右)。富樫さんはこの人たちと運命共同体として、しな文化のデザインに挑む。

山形デ、

コラム

ピエロが
揺さぶる
デザイン



執筆：澁谷和之（澁谷デザイン事務所）



地域には、大学生に「アホ」と言われるような大人・デザイナーがもっと増えなくてはいけないよ……と、富樫さんの大きな背中を見て改めて感じた。

写真：五十嵐 文

鶴岡市にUターンするまで、富樫さんは通信機器やIT関連の営業マンだった。グラフィックデザインや美術を専門にしてこなかったからこそ、しなの木の布の活用に留まらない展開や、行政区分を超えた反復横跳びなど、型に囚われないデザインの形を生み出しているのかもしれない。「今あるものを次の世代にどう渡していくか、今を考えることがデザインだと思う」と、未来がどうなるか、未来をどうするかまでは考えていないと富樫さんは話す。渡会さんに託された種が育っていく未来を想像してみたくなる。



写真：Shintaro Sato

『東北デ』の公開デザイン討論会～日本海篇～に登壇した富樫さんは、自らのことを「まだ、デザイナーになって3日目の者です」と冗談混じりに自己紹介していたが、いつまでも、今の「富樫シゲトモ」という「3日目のデザイナー」のままで、在り続けてほしいと願ってしまうのが、われわれ『東北デ』編集部の本音。

富樫シゲトモさん（以下、「キャプテン富樫」と呼ばせていただく）に初めて会った時、僕には彼が「ピエロ」にしか見えなかった。ヨーロッパの喜劇・道化芝居などに登場する道化師・ピエロは、滑稽な格好や言動などをして他人を楽しませる存在であり、調べるところによると、顔に描かれている涙のマークは、人間の喜怒哀楽だけでは足りない、人それぞれの数えきれない感情を表しているという説があるようだ。

キャプテン富樫との初めての顔合わせは、オンライン上でのことだった。ミーティング予定の定刻になり、待っても、待っても、オンラインの画面上に現れない彼を待っていると、「すみません！ すみません！ 間違ってる別のミーティングのURLさアクセスしちゃってだ……」（汗笑）と、ただただ人間の可笑しみが漏れ出でしまっているキャプテン富樫の人柄に、一気に惹かれる自分がいた。

そして、実際に生のキャプテン富樫に会えるという、待ちに待った山形取材当日。またしても、待ち合わせの場所に定刻に現れない彼から僕に一本の電話が。「ごめん！ ごめん！ 澁谷さん、朝これ

いない生の言葉や行動一つひとつには感じられた（冒頭のエピソード二つも含めて）笑。

今回の『東北デ』の活動のなかで、研鑽すべきキーワードに「デザイナーリテラシー」という言葉がある。一般社会において「デザイン」という分野に関する知識や理解力、そして、その知識を活用する能力を育むことが、今こそ必要なのではないかという仮説ではあるが、そんなデザイナーリテラシーを考え、育んでいく上で、今後我々が考えていくべき大切なことの一つに、「デザイナーへのなり方をデザインする」という命題があるのではないかと、僕は思っている。「デザイン」という領域の話をもっと一般的なものにしていくには、まだ日常的に特別視されがちな「デザイン」という視点を、皆誰もが普通に学べることができる、必須科目的なものにすべきだろうと思うのだ。^{*9}

キャプテン富樫が首都圏での営業マン時代を経て、さまざまな経験を積み重ねた先に、「羽越のデザイン企業組合」という冠を掲げたいと、意識が動いたこと。そこには、これからの社会が必要とする

がら向がおうど思ったら、車バッテリーあがっちゃってで（汗笑）。先に店さ入ってで！」と、完璧な山形（庄内）訛り^{（まじまじ）}で謝罪し、堂々と遅刻するキャプテン富樫。その後、駆け足で遅れてやってきたキャプテン富樫は、まさにピエロのような立ちと立ち振る舞いで、儀礼的な名刺交換もそこそこに、自らが愛する山形・鶴岡の街、そして、しな文化に対する愛のプレゼンテーションを、ノートパソコン片手になんの迷いもなくはじめたのだ。^{*8}

そんなキャプテン富樫は、もともと首都圏で通信機器やIT関連の営業マンだった経歴の持ち主で、全くもって、いわゆるデザイン畑とは違った業界で汗をかいてきた人だ。そんなキャプテン富樫が、自分のルーツ・山形が誇るシナノキという文化・価値との出会いがきっかけで、「デザイン」を意識するようになった経緯は、とても素直で、自然で、理想的なことに僕には映って見えた。

いわゆる、美術系の大学や、美術の専門学校などで学んできた層とは明らかに違う、デザインを必要とする明快さと気持ち良さ^{（？）}が、彼のフォーマット化されて

デザイナーの「生まれ方」を考える上での、大切なヒントが隠されているように思えてならない。

そんな、「デザイナー」だと、はっきり呼んで良い存在なのかどうなのか……、まだ今の段階ではわかりかねるキャプテン富樫のライフワークの一つに、「境界の反復横跳び」の活動（世界大会なんて展開もしている！）がある。さまざまな境目（県境など）で反復横跳びをするだけの大会なんて、「デザイナー」という領域のイメージからは、果てしなくかけ離れた、無駄なアクションのように思える。しかし、そんな無駄にも思える、儂い行為・デザイナーにこそ、人間の奥底に秘められた、喜怒哀楽以上の感情を揺さぶってくれる、ピエロの影が見え隠れするように思えてならないのだ。

最近、キャプテン富樫が僕に投げかけてきた質問がこれだ。「東北には、議員をやっているデザイナーっているが？」。

彼の意識・眼差しは、まさに「これまでのデザイン」と「これからのデザイン」の境界線を大きく、大胆に超えていく。



山形デ、| 富樫シゲトモ

山形県鶴岡市生まれ。大学卒業後、東京で就職し、2015年にUターン。地域活性化を掲げるNPO法人の立ち上げを行い、活動しながら、2019に「羽越のデザイン企業組合」を起業する。「自然と共に生きる暮らしを大切に、文化が持つ大きなチカラを伝える」という経営理念を掲げ、文化に寄り添ったデザイン活動をしている。



*8 「はじめまして」の挨拶もそこそこに、お昼ご飯そっこのけで突然はじまったキャプテン富樫の、しな文化レクチャーに、一同唾然（笑）。



*9 地域の自然・文化について、体験し学ぶプログラムを子どもたちに提供しているキャプテン富樫。まさに「未来のデザインの授業」がここにはある。



鈍臭いけど、
あつたかい。
適度にアホで、
程々マジメ。



アートの香り漂う、花巻市東和町の土沢商店街

「ケンイチさんは、私たちにはデザイナーと名乗らないですし、デザイナーというよりも鈴木家の父という印象が強いです。すごく家族との時間を大切にされています」と話すのは、花巻市で子どもも大人もののびのびと参加できるイベントや体験づくり「あそびねkko」を運営す

話を聞きます
スズキケンイチ

アートディレクター 〒028-0115
岩手県花巻市東和町安懐3区96-3 B-2
☎ 070-8528-3376

* 1

話を聞きます

岩手県花巻市在住のスズキケンイチさんの名刺には「話を聞きます」という言葉がアートディレクターという肩書よりも大きく書かれている。^{*}北上市出身で、20年以上東京で広告デザインを経験したスズキさんは、2020年に花巻市東和町に移住。東和町は2016年に合併して花巻市となった地域で、日本近代絵画

の先駆者として知られる萬鉄五郎を輩出した町だ。2日間で8万人もの人が訪れる「土澤アートクラフトフェア」でも知られている。

移住してからは、アートディレクターやデザイナーという言葉がほとんど機能しない環境下で、名乗ることの気恥ずかしさと、自分の存在価値やデザインとは何かを問うことも多かったというスズキさん。「自分の存在意義を確認したい」という想いから、2023年にトークイベント「デザインのはなし」を始めた。以来、多様なジャンルのゲストを迎え、デザインの考え方は誰しもがもてるものであることを、一方的に伝えるのではなく、意見を交わす活動を行っている。

「デザインのはなし」
あそびねkkoの
デザイン

2023年
9月8日
10:00-12:00

※定員 1000名 ※学生無料
お問い合わせ: 電話・PayPay・メール
会場: 土沢アートクラフトフェア会場
定額: 3000円(税込) ※学生半額

* 2



岩手の遠野で活動するデザイナー・阿部拓也さん(P90)も、スズキさんのこの活動に共感し、遠野での開催を企画したという。

スズキ
ケンイチ

岩手デ、



写真: 伊藤隆宗 (イトウタカムネ写真事務所)

実感して、デザインする

三人は、ともに、^{*7}「いっしょにつくる子ども食堂「みんなでごはん」」を企画するなど交流を深める仲であり、早希さんと芳美さんが共同代表を務める「東和あそびMAPづくり実行委員会」^{*8}が発行する『東和あそびまっぷ』^{*9}を制作する際は、そのデザインをスズキさんが担当することになった。この「まっぷ」は、公園や公民館など、名前のある場所に限らない「あそびば」を、早希さんと芳美さんの話を聞きながら作った、たぐさんのつばやきのある町の地図。「作りながら大喧嘩もし

る岡田早希さんとスズキさんは、『イージャーはなまき』^{*5}を運営し、移住コーディネーターでもある、OKD Worksの岡田芳美さんを介して出会った。コロナ禍での移住だったこともあり、とくに子どもの遊び場を探すのに苦労したというスズキさん。ふたりの岡田さんと出会ったことで、「移住後、はじめて景色に色がついたと思った」という。

「1日の時間割は家事、子育て、その他」と、子どもとの暮らしを第一に考えている。

「おむつ替えができますよとか、ホスピタリティが充実した施設を紹介するものもありがたいマップなんだけど、東和町はそうした施設が充実しているわけではなくて、ふたりの岡田さんの話を聞いていくと、「あそびば」というのは、決して公園などの施設を指しているのではなかった。自分が見つけた小道が好きだとか、春になるとこの花が咲いて、それを数えるのが好きだとか、すぐくパーソナルに属している思い出みたいなもののことだということがわかったんです。そう思ったら、写真集とか詩集のようなものを「まっぷ」って名づけていいんじゃないかって、提案をしました」（スズキさん）。

たけど、ケンイチさんは、本音を言ってくれる、愛のある人」と早希さんは話す。



*4・6 左が岡田早希さん、右が岡田芳美さん。本音をぶつけ合えるクライアントとデザイナーの理想の関係がある。

写真：伊藤隆宗（イトウタカムネ写真事務所）



*3 あそびば nekkoweb



*5 イージャー はなまき WEB



*7

子育てを実感しながら関わるデザイン



*8

東和の土地で「遊ぶ」ということに、真摯に向き合った末に生まれた「東和あそびまっぷ」。

写真：伊藤隆宗（イトウタカムネ写真事務所） 撮影場所：花巻市立東和図書館



あそびばまっぷ WEB版



今回の『東北デ。』岩手取材の際、スズキさんはふたりのお子さんを送り迎えする合間を縫って、われわれの取材に応じてくれた。デザイン(仕事)を自分の中心に置き、暮らしているデザイナーと、暮らしを自分の中心に置き、デザイン(仕事)をしているデザイナー。限られた1日の時間に向き合うスズキさんの姿勢に触れていると、その街に暮らし、デザインするということの本来の在り方を考えさせられる。

写真：伊藤隆宗(イトウタカムネ写真事務所)

会いたい人に、会いに行く

愛のある人と思われるのは、きっとスズキさんが人の熱量や、ものの温度や重さなどを、自身で実感することを大切にしているからだ。

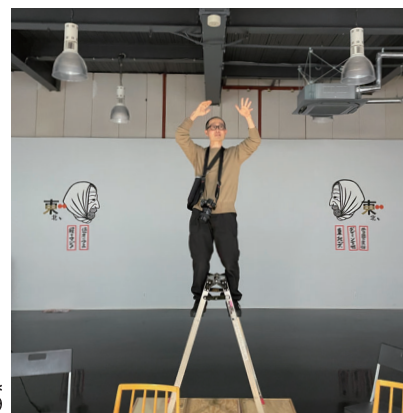
「東京でデザインをしていた頃は、歯車にならざるを得ない仕事が多くて、クライアントと直接話ができる機会も多くありませんでした。岩手で一緒に仕事をしているカメラマンの伊藤隆宗さんは、現場に行く、撮影する被写体の方々の名前を一人ひとり聞いて覚えて、話しかけたり、相手が日ごろ仕事で使っているものを持たせてもらったり、汗をかきたがるんです。僕もそれは正解だなんて思っていて、映像では実際は伝わらないものを、少しでもわかろうとすることが、表現するものに出てくるんですね。感じないで動くだけの人が多いじゃないですか。僕はデザインしたいんじゃないで、今も『実感』がほしいだけな気がします」。

だからこそスズキさんは、会いたいと思った人の所には、遠い場所でも極力会いに行く。

いに行く。

花巻市にある成和建設^{*10}とは、会社案内のデザインにはじまり、同社の関連会社・成和農園が耕作放棄地を活用して育てる古代米「黒米ハレイロ」^{*11}のネーミングやパッケージデザイン、販路開拓やリクルートサイトの制作など、関係が長く続いている。

「黒米ハレイロ」のパッケージデザインは、なかなか決まらなかったというが、スズキさんは根気よく、さまざまサンプルを提案しながら、何度も会いに行ったという。



*9

「東北デ。」の公開デザイン討論会の記録写真は、すべて伊藤さんに依頼。スズキさんの言うとおり、現場で目一杯に汗をかくカメラマンだ。

写真：澁谷デザイン事務所



*10・11

成和建設の関連会社「成和農園」から開発・販売されている古代米「黒米ハレイロ」。とてもシンプルな印象だが、ここに至るまでの過程・やりとりは濃厚だったのだろうと想像される。



「スズキさんの熱量がすごかったんで、それに応えようと、私たちも負けない熱量で応えていましたね。形を作って終わりじゃなくて、その後の売り方や見せ方も提案してくれたので、私たちも自分たちが会社をどうしていきたいのか……というところまでを考えるきっかけになりました」と、成和建设の取締役常務・小田島裕樹さんは話す。

「本当は、あれもこれもやりたいんだけど、できる範囲が限られているので、自分が注力できるものに、より集中して線引きしていくことが、大事なと思っています」とスズキさん。

正直に、真っ直ぐに、クライアントの情熱に寄り添う。そんなスズキさんは、移住した花巻市東和町という地に暮らし、子育てをし、本当に大切だと決めたことに、丁寧に向き合っている。



岩手デ、 コラム



聞くことと
待つことと



*12 成和建设の取締役常務である小田島裕樹さん。

デザイナーは経営を学び、
経営者はデザインを学び、
互いに歩みよる努力や姿勢が
伴走の理想ではないか。

「東北デ。」の公開デザイン討論会～太平洋篇～に登壇する際、スズキさんが投げ掛けてくれたメッセージ。



「自分の一日は、大半が家事と子育てにほとんど割かれて、その残りの時間でデザインをしている感じです」。僕がスズキさんに初めて会った時、彼はそう一言、何かをあきらめているかのように、どこか寂しそうに、しかしその一方で、そうあることが本質であるかのように、視線は合わせず、ぼんやりとした眼差しで、どこか遠くを見つめ、言葉にしてくれた。

今現在、自分自身も5歳になる息子と、2歳になる娘の父親として、「一応」子育てをしているような状況にあるが、僕の場合はスズキさんの在り方とは全くもって真逆。一日の大半はデザインの時間として割かれ、その残りの時間で子育ての真似事をしているような状態。

このどちらの働き方・子育ての仕方、暮らしのバランスが良いのか否かは明言できないが、スズキさんと話している時も感じるのは、限られた時間や労力、環境の中で精一杯思考した先に、削ぎ落とし、練り出された言葉を持つ、本質的且つ圧倒的な説得力の強度である。

『東北デ、』という活動のなかで出会いたいと思っているデザイナーの条件の一

やりたいだけかもしれない。なんなら私が褒められただけかもしれない。それでもいい。実際私は褒められた親ではない。非ばかりで、子どもに謝りきれない事ばかり。日々そうだ。……(続く)。

僕は、「デザイナー」として生きるスズキケンイチというより、「父親」として生きるスズキケンイチという人間が、気になってしょうがないのかもしれない。

秋田公立美術大学の教授であり、さまざまな境遇の子どもたちと日々向き合っている方と、ある日話をしていたときのこと。「澁谷さん、これまでの社会は「衣食住」が満たされれば良い時代でしたが、きつとこれからの社会に必要なのは、「聞(聞いてあげること)」なのだと思う。つまり、「衣食住、聞(ぶん)」が必要な時代なんだと思うんです」という話になった。

その時、僕の頭の中に真っ先に浮かんだのが、スズキケンイチさんという人だった。スズキさんの名刺には、肩書きを記す場所に、大きく堂々と「話を聞きます」と書かれている。スズキさんは、「聞いてくれる」デザイナーであり、じつくりと共に「待つ」くれる「デザイナー」だと、『卒

つに、デザイナーである前に、その土地の生活者であるということが挙げられる。つまり、その土地に普通に暮らした先に、必要の見出されたデザインを大切にしている「デザイナー」に会いたい……とても言えば良いだろうか。商業的な消費されるデザインとは一線を画した、生の暮らしぶりを感じさせてくれるデザイナーとも言うおうか……、言葉にすればするほど難しい。

僕が気になるスズキさんのデザインの一つに、彼の息子さんが描いた昭和のヒーローの絵を書きためた展覧会をまとめた『卒展スズキイシ』という記録冊子がある。息子さんであるイシ君が、とにかく無心になって大好きなヒーローを描き続けた、圧倒的な物量の絵と、その過程をすべて愛で、一室の壁面にびっしり展示。その時の様子を濃密に詰め込み、記録した冊子である(P47)。そして、その冊子の中でスズキさんは、「今を生きる人たちに」と題して、一言記している。その冒頭の一部をここに紹介したい。

「この展覧会は、親のエゴかもしれないし、子どもにかこつけて、私が展覧会を

展スズキイシ」の冊子を目の前にして、改めて感じ直していた。

そして、2025年2月に仙台市で開催された、『東北デ、』の公開デザイン討論会「太平洋篇」の会の最後は、「デザインとは「聞く」こと、そして、「待つ」ことかもしれないですね」という僕の言葉であり、スズキさんの言葉でもあると思う一言で、締めくくらせていただいた。

あの日の公開デザイン討論会の場で悔やまれることが一つある。討論会が始まる前、会場設営の忙しさにバタバタしたなかで、「卒展スズキイシ」の冊子を手にするタイミングがあった。その時、つい無意識に空いていた片手(片手間)で読んでしまっていた僕に、スズキさんは「片手間で読まないでよ」と、僕をやさしく諭してくれた。これが、スズキケンイチという「生活者」と、澁谷和之という「デザイナー」の大きな在り方の違いだと、その場で甚く反省し、学んだ。

スズキさんとは、その後「デザインの仕事の話なんて一切しないで、仲良くやりたいですね」と言葉を交わしている。



*13

岩手ADC Competition Award 2023で「岩手ADC賞」を受賞した一冊『卒展スズキイシ』。「これは子どもを肯定するふりをして、自分を肯定させる作業だったかもしれない」と、スズキさんはこの世界に一冊しかないデザインを振り返っている。



岩手デ、| スズキケンイチ

岩手県北上市生まれ。高校と大学で絵や美術を学び、東京へ。イラストと写真の学校へ通いながら、複数のアルバイトやボランティアを経て、広告制作会社へ。2020年に岩手県花巻市へ家族と移住。飲食店を家業とする家に生まれ、人が集まり、食べ、それを提供する料理や場所を見て育ちました。そこには、人を介したサービスの本質があるのではないかと考えています。



*1 せんだい3.11メモリアル交流館の常設展スペース

その場所で生きる人
ができるデザイン

宮城県仙台市若林区の沿岸部は、仙台湾に面し、東日本大震災で発生した津波により大きな被害を受けた地域だ。その入口とされる仙台市地下鉄東西線の終点・荒井駅舎内には「せんだい3・11メモリアル交流館」が整備されている。東日本大震災の実像を伝える常設展に加え、年に

数回企画展を開催。伊藤典博さんは、企画展シリーズ『3・11現場の事実×心の真実』をきっかけに、同館の企画展の広報ツールや、展示ヴィジュアルのデザインを担当するなど関わってきた。^{*2}

伊藤さんは、静岡県三島市の出身。東京の大学院を卒業後、広告代理店に入社し、首都圏で勤めたのちに、転勤で仙台市に居を構えた。それから3〜4年経った頃、東日本大震災が発生する。

首都圏に戻る選択肢もあったが、宮城県は伊藤さんの両親の故郷。幼少期より祖父の家を訪れるなど地縁もあり、「未曾有といわれた東日本大震災と同じように、仙台でデザインを仕事とすること自体も、何百年に一度の巡り合わせの機会なのかもしれない。この土地でがんばってみよう」と仙台に留まる決意をする。2012年に「合同会社スカイスター」を設立し、独立した。

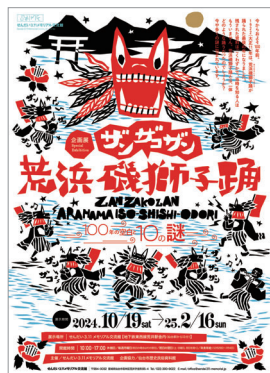
「この時代、この場所で生きている人ができるデザインというものがあると思う」と、伊藤さんは話す。



*2 企画展 3・11 現場の事実 × 心の真実 『結〜消防・命のプロが見た東日本大震災』(2018)



企画展 『ザンザコザン 荒浜磯獅子踊』(2024)
PR動画は学生が企画・編集制作を担当。



教育の現場でデザインする



合同会社
スカイスター
仙台青葉学院大学・
短期大学
伊藤典博

宮城デ、





*3
TRUNK
ウェブサイト



*5
合資会社亀兵商店のコンセプトブック&パッケージデザイン

独立に際し、伊藤さんは若林区卸町にあるクリエイター向けの会員制シェアオフィス「TRUNK-Creative Office Sharing」*3に入居した。卸町は1965年に卸売業に特化したエリアとして整備された東北最大の流通拠点。同地の卸商団地地区は、2009年から仙台市の「クリエイティブ産業立地促進助成制度」の対象地区として指定されている。ここでの出会いを通じて、伊藤さんは宮城県で数々の仕事を手がけていくことになった。

商業と教育を結ぶ

そんな伊藤さんが、独立して10年を迎える頃から「新しいことにチャレンジしたい」という想いが芽生え、現在は大学の専任講師としての道を歩み始めている。*4

「商業ベースだけでなく、よりデザインの可能性を追究したいと感じるようになったんです。作ったものが、地域への還元や教育に役立つものであってほしい。そのためには研究機関に所属することで、自分が思い描いているものを実現できるのではないかと考えました」（伊藤さん）

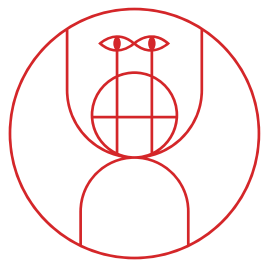
仙台青葉学院大学・短期大学ビジネスキャリア学科の教員となり、「メディアデザイン論」、「広告デザイン演習」などを担当する伊藤さん。「せんだい3・11メモリアル交流館」のほか、1861年創業の宮城県仙台市の味噌醤油屋「合資会社亀兵商店」*5など、合同会社スカイスターで広報物のデザインなどを担当したクライアントの現場が、学生のフィールドワークの現場となっている（P.50）。



写真：嵯峨倫寛



*5
合資会社亀兵商店



NORI NORI DES
*4 NORIHIRO ITO Art & Design Laboratory

『ノリゼミ』デザインゼミナールのロゴマーク



「デザインがあれば、アレもコレも、みーんなノリノリデス」ゼミナールを通じて、よりデザインの有効性を理解し、さまざまな日常のなかに生きるデザインの魅力を発見してほしいとメッセージする伊藤さん（前列中央）。



*5



もともと、ビジネスの取引先だったクライアントの現場を、そのままデザインの教育の現場として転換していくところに、伊藤さんの広義な意味での“地域のデザイン”がある。そこには、もともとプレイヤーとして、シビアな現場に向き合っていた伊藤さんならではの、教育の在り方と説得力があるのだろう。



*7・8

前列の真ん中が、カメラマンの嵯峨倫寛さん。伊藤さんは後列左。ちなみに前列左が、昨年度から『東北デ』の宮城のデザイナーとして関わっていただいている横塚明日美さん(P97)。聞くところによると、彼女自身が独立し、合同会社nekiwaを設立する際に、多くの刺激や影響を受けていたのが、伊藤さんと嵯峨さんだったとのこと。

「デザイナーという立場だけでクライアントと関わる時は、例えば商品を周知する、商品の売上を伸ばす、そのために販促物を制作して、いくら稼ぐか、というビジネスの視点を優先に考えます。しかしそこに教育という視点が加わると、商品に関わる原料を作っている生産者も含めた全員の関係性が深まることや、文化が伝承されることで地域に何かしらの還元がされること、それが学生の教育資源となるのが目的となってくる。短期間では答えが出ないことも多く出てくるんですよね。そこはデザイナーの視点だけではできないし、教育の視点だけでも取り込んだ、産学連携の機会を増やしていきたいですね。」

この働きかけは、日ごろ見えないデザイナーの仕事や、仙台市のようなオフィスワークの多い都市部ではとりわけ接点が少ない農林漁業や加工業など、学生がものづくりの現場を身体的に体感できる機会づくりとなっているだろう。同大学が美術系大学ではないこともミソだ。

宮城県石巻市出身の「TRUNK-Creative

Office Sharing」で伊藤さんと出会った写真家の嵯峨倫寛さん(Hello High)は、「仙台は大企業の支店が多い街なので、ほかの都市部ですでにあるものをやりたいという発想になることが多いんですが、それがお客さんのニーズと合っていないことも多々あるんですね。そういうときに地域にいるデザイナーの力が必要になってくると思うんですが、カメラマンの仕事もデザイナーの仕事も、センスで片付けられてしまうことが多くて、ちゃんと専門家の仕事であることを、認識してもらうことも必要ですよね」と話す。

そんな嵯峨さんと伊藤さんは、「TRUNK」で出会った仲間たちとともに、「どこでも写真館 cui cui」という自主的な活動も長年続けている。どこでも呼ばれた場所に出向いていき、記念写真を撮ってくれるというスタイルは、ビジネスベースで考えていたら簡単にはできないこと。

しかし、こういった儲け無視で汗をともにかける仲間がいるということは、今後、デザイナーやカメラマンの必要性を地域に認識してもらうためには、とても大事なアクションかもしれない。



*7・8



嵯峨さんが伊藤さんで行っている「どこでも写真館 cui cui」の告知チラシと作品の一例。関わっているメンバーみんなが、自ら楽しんで関わっている印象を受ける、とにかく楽しそうなプロジェクトだ。

宮城・仙台の デザインを問う

宮城デ、 コラム



執筆：澁谷和之（澁谷デザイン事務所）
写真：どこでも写真館 ouicui 「白イチ2023(白石市)」にて出店者の方々と

「デザイン」が誰もがもちえる考え方であると同時に、地域や企業、個人にとって本当に必要なデザインをとらえてくれるデザイナーと出会うには、より多くの人にグラフィックデザインだけではなく「デザイン」を学べる機会が必要であるし、デザイナーも、デザイナーとはどんな仕事を自ら伝えていく必要があるかもしれない。^{*9}

東北最大の都市・仙台市。東北のなかではどこよりもグラフィックデザインの仕事や、デザイナーという肩書きをもって仕事をしている人は多いはずなのに、『東北デ』と共鳴するデザイナーと出会うには時間がかかった。

人口が多いからなのか、嵯峨さんが言うように支店が多い街だからなのか、さまざまな要因があるのだろうが、伊藤さんがデザインの授業を通じて、身近なものとを観察し、思考する機会を増やしているのは確かだ。



*9

高齢者や障がい者の方など、比較的デザインの現場から遠かった方々に制作の段階から共同参加してもらい、デザイン形成していく手法「インクルーシブデザイン」の領域でも、伊藤さんは積極的に活動をしている。地域において多様な人々が、デザインを通じて、おのおのの可能性を存分に追求できる社会と契機を目指すこのような領域には、『東北デ』に関わるデザイナーたちも近年、積極的に取り組みは始めている。

ちなみに、この写真は、仙台市が主催する「SHIRO Lab.48 時間マラソン」で、楽天野球団、東北楽天ゴールデンイーグルスの協力のもと、デザイナーと障がい者の方が共同で新商品のデザインに取り組んだときの記録。伊藤さんもデザイナーとして関わり、球団公式グッズとしてトートバックやスポーツタオル等のデザインが採用され、本事業のベスト・アートディレクション賞を受賞している。

『東北デ』の言い出しっべの者として、あくまで、僕個人の見解や理想に寄った物言いになってしまいかもしれないが、正直なところ、宮城県(特に仙台市)では、『東北デ』的に共鳴するデザイナーはなかなか出会えない……という悶々とした時間があった。その要因としては、P54の項でも言及している通り、さまざまな理由はあるかと思うが、東北という枠組みのなかで「デザイン」を考え、深めていくには、東北の中心・ハブである宮城・仙台の今の在り方を無視することはできない。その今を正直に見つめ、前向きに疑っていく姿勢は、とても意味のあることだと僕は思っている。

そんな宮城という地で、いよいよ我々が出会うことになったデザイナー・伊藤典博さんは、今現在13人いる『東北デ』のデザイナーのなかで、唯一ルーツが東北ではない、静岡県三島市出身のデザイナーである。両親や祖母のルーツが宮城にあるという縁のもと、東日本大震災という未曾有の出来事をきっかけに、東北という地に腰を据え、デザインで関わり続けてきた、心意気のある一人だ。

代の子どもたちが広く学ぶべき姿勢のような、ごくごく当たり前のものであってほしいと願っている。

長年、スカイスターとしてもパッケージのデザインなどで関わり、教育の現場に移ってから学生フィールドワークの現場として、伊藤さんがお世話になっているという「合資会社亀兵商店」。仙台市のビジネス街のど真ん中に、こんな鄙びた歴史ある味噌醤油屋があるの？と驚かされるような、地元で長年根付いてきた佇まいを感じさせる老舗だ。この7代目となる亀田亜蘭さんのデザイナーに対する関わり方と、敬意を表す姿勢には驚かされた。過去に伊藤さんが提案したプレゼン資料を、すべて丁寧にファイリングし、過去の案件のデザイナーのやりとり・過程についても、しっかりと記憶されているのだ。^{*10}そして、一方のデザイナー・伊藤さん(合同会社スカイスター)のHPもご覧いただきたい。彼のデザインワークスを紹介するページは、最終的な成果物だけ紹介するものではない。そのデザイナーの成り立ち・過程をきめ細やかに記録、紹介しているHPなのだ。^{*11}

仙台で合同会社スカイスターとして独立して10年。傍目から見ると、デザイン会社として11年、12年と実績を積んでいくことで、十分に安定した未来は見えるように思えるなか、伊藤さんはスカイスターとしての商業的なデザインからは一度距離を置き、デザインの研究と教育の領域へと思考をシフトする。『東北デ』の仲間である岩手のデザイナー・阿部拓也さん(P90)や、青森のデザイナー・佐々木遊さん(P76)も、「どこか想像できてしまう自分の未来とは違った場所や立場にシフトしたかった」と言葉にしていたことを思い出す。自分の人生とデザインに正直に向き合おうとするデザイナーたちは、とにかく強く、生き生きしている。

山形のデザイナー・富樫シゲトモさんの項(P37)でも触れているが、地域のデザイナーリテラシーを育てていく上で、デザイン教育の現場をデザイン・設計していくことは、今後不可欠だと感じている。その点、伊藤さんはその教育のポイントをしっかりと抑えていて、いわゆる美術系大学の教員にはならず、一般的な教育の現場に広義なデザインとして、地道に働きかけている。「デザイン」とは、次世

あくまで僕の現場経験の範囲の話にはなるが、大抵の場合クライアントは、最終的なデザイン成果物が出来上がってしまふと、それ以前のデザインを検討していた過程には興味が向かなくなるものだ。つまり、クライアントとデザイナー双方の対話の過程こそ、そのブランドの本質を見つめ直す大切な要素が見え隠れしているのに、最終的な造形物だけが機能するものだという狭い認識に陥っていく。クライアントとデザイナー双方の間で、必死にかいた汗の記憶を常に忘れず、愛でていられる関係性というものは、確かな信頼関係を育み、そこには心配せずとも強度のあるデザインが持続していく。

正直に言う。僕個人、本音を言うと、都会化し無個性になってしまったように思われる仙台の街のど真ん中に、こんな濃厚な関係のデザイナーが、静かにも息づいていたことに驚いた。そして、亀兵商店さんのようなデザイナーリテラシーを携えたクライアントと、伊藤さんのようなデザイナーとの関係を感じられたことに、僕はお節介にも、これからの東北・仙台のデザインに安堵を覚えた。



亀兵商店のコンセプトブックを原案に出版した絵本『ピッピのおみそ』は、宮城県美術館はじめ宮城県内の市区町村53施設の図書館に配本され、食育や地域の食文化の発信を担っている。



スカイスターHP



*10

われわれ『東北デ』編集部取材陣がざろざろと伺った際、亀田亜蘭さん(左)は丁寧にファイリングしていた、伊藤さんのプレゼン資料をすべて見せてくれた。



宮城デ、| 伊藤典博

静岡県三島市生まれ。日本大学大学院芸術学専攻科博士前期課程修了。広告代理店の首都圏営業本部にてデザイナーとして勤務後、東北支店への転勤を契機に仙台市へ。2012年、SkyStars.LLCを設立。現在は、仙台青葉学院大学・短期大学にて、デザイン領域の専任講師として、東北地域におけるデザイン研究と教育に取り組んでいる。



*1 『永遠の0』の現場の様子。写真奥右が小池さん。

きっかけは東日本大震災だった。東京で暮らし、映画『Always 3丁目の夕日』、『永遠の0』、『きこりごん』など、*1 数々の作品に装飾部で参加してきた小池晶子さんは、「高校生の頃はあまりおもしろくないと思っていた」という故郷・福島市に気持ちが向くようになる。

福島市は内陸のため津波はなく、地震被害は比較的少なかったものの、風向き

福島で暮らしてゆく

によって放射性物質の通り道となり、避難区域ではないが放射線量は高いという、目に見えない不安を抱えていた。

そうした福島でできることを探すなか、小池さんが最初に出会ったのが『プロジェクト FUKUSHIMA!』。福島県出身・在住の音楽家と詩人が代表となり、有志によって立ち上げられた、音楽を中心としたフェスを開催するプロジェクトで、小池さんは「福島大風呂敷」の制作に参加する。

初年度のフェス会場「四季の里（福島市）」で始まった取り組みで、会場の放射線量測定に協力した木村真三博士（放射線衛生学）の、「表面被曝を少しでも減らすという意味で、会場の芝生を大きな布やシートで覆ってはどうか」という提案をきっかけに企画。全国から集められた色とりどりの布が巨大なパッチワークとなって会場に広げられ、その風景はプロジェクトを象徴するアイコンとなっていった。

小池さんはこのプロジェクトへの参加をきっかけに福島で活動をするおもしろい人たちと出会い、福島で暮らすのも楽しいかもしれないという思いになったと



*2 『プロジェクト FUKUSHIMA!』の企画のひとつ「フェスティバル FUKUSHIMA! 2024 納涼! 盆踊り」のポスターデザインも小池さんが手掛けた。



*2 立ち上がったきっかけは、東日本大震災であったものの、福島のロックを感じるこの場こそが、今の小池さんの原点のひとつなのだろう。



福島デ、

手作業
小池晶子

手で、形にする力

土偶と熊グッズを販売するイベント「どぐま市」で、小池さんは熊担当として、福島市によく出没する熊を木彫りのブローチなどにして発信をしている。

形あるものを生み出す力

2021年からは、自身も好きで通っていたという猪苗代町の中ノ沢温泉で「中ノ沢こけし祭り」のメインビジュアルや会場美術を担当するようになった。目の周りが赤く、「たこ坊主」の愛称で親しまれている「中ノ沢こけし」の特徴は、1922

いう。2014年5月には、福島市の「あんざい果樹園」で開催した『林檎畑の演奏会』（ハナレグミ、長見順、岡地曙裕ライブ）の会場美術を担当。そして、同年の7月に福島市へUターンした。

Uターン後、小池さんはあんざい果樹園に通うようになる。同園は多くの人が行き交う開かれた場所で、小池さんの活動を応援してくれる土壌があった。直売所の手伝いに始まり、アースオープン（ピザ窯）を作るイベント、お酒のイベント「スナック小池」、作品展示など、東京ではできなかった気になることをとにかくやってみることで、福島での人間関係を徐々に深めていくことになる。

アイデアの主は小西食堂4代目の西村和貴さん。店内では猪苗代町の酒蔵・稲川酒造店の「たこ坊主こけしワンカップセット」も販売している。描かれているイラストを手がけたのは小池さんだ。西村さんという「デザイナー」が当地にいますと、小池さんのグラフィックデザイン

年に同地へ移住した岩本善吉により生み出されたと考えられている。一部の工人によりその技術は受け継がれてきたが、2022年のたこ坊主誕生100周年を記念して、はじめてこけし祭りを開催することになった。2021年に前年祭を開催し、小池さんは以来この土地と関わっている。

中ノ沢こけし祭りは、始めて間もない取り組みだが、温泉街にある「小西食堂」には、何十年もこけしのまちとしてPRしてきたかのように店内にこけしコレクションが並んでいる。特に目を引くのは、店頭に設置されたこけしの自動販売機。もともと地元客に愛される地域の食堂だったが、これを設置したことで県内外からお客が訪れるようになったという。



*4 「あんざい果樹園」関連の看板も、小池さんが手作りしたものだ。この場所こそ、デザイナー・小池晶子が生まれた原点なのだろう。



*7 中ノ沢温泉の純粋なファンでもあった小池さんならではの、自然なデザインが地域に馴染んでいる。



*2 「フェスティバルFUKUSHIMA! 2024」の記録。小池さんは一番前の列、右から2番目。 写真：○○○○○



*3 美術担当として「福島大風呂敷」の設営指示を出す小池さん(写真手前中央)。



*6 お酒好き小池さんの「スナックコイケ」



*5 「林檎畑の演奏会」の会場美術。



*6



*4 初対面、第一声「小池の父と兄です」と、本当の親子のようにわれわれ『東北デ、』編集部取材陣を迎え入れてくれたあんざい果樹園の安齋一寿さん（右から2番目）と伸也さん（1番右）、そして久子さん（1番左）。わざわざ「デザイン」の話なんてすることが不自然なくらい、小池さんは自然な関係のなかで手を動かし、デザインに関わってきて、今に至るのだということが、よく感じられた時間だった。

が、より生きたものになっている。

「手作業」を屋号に掲げ活動する小池さんは、映画やCMなどの装飾部にいた経験から、自らの手で形あるものを生み出す力がある。

中ノ沢温泉旅館案内所に勤務する安部なかさんとは、安部さんが作ったこけしの顔はめパネルを、小池さんが補修してよりよいものにしたことで関係が深まったという。安部さんは中ノ沢温泉の歴史に詳しく、小池さんが中ノ沢こけし祭りに関わるデザインをするにあたって、指針となる情報を多く教えてくれた人。何者なのか、どのように自分たちの暮らしとつながっていくのか、想像しにくいデザイナーの仕事だが、求めているものをその場でわかりやすく形にし、提示することは、理解され、受け入れられていくときにとっても大きな助けとなることを示してくれる事例だ。

小池さんのように、フィクションの世界を作っていた美術の人が実際のまちの現場で活躍している例はたぶん少ない。



*8 こけしの自動販売機と、ワンカップのデザイン。



*9 まさに、「中ノ沢のデザイナー」とも言える西村さんと小池さんの最強コンビが、中ノ沢温泉をおもしろくしていることは間違いない。

畑違いの業界と思ひ込んでいて、役に立つことがあると想像する機会自体がないのかもしれない。

福島市大町にある県庁通商店街振興組合とは、かつて同地で開催されていた闇市を再現したにぎわいを取り戻そうと「夜見市」を開催。小池さんは会場美術、衣装の提案など、当時の姿を想像させる風景をその場所に見事に出現させた。

「小池さんは二次元も三次元も作れてしまう強さがあるし、お年寄りにも子どもにも好かれる、住んでいる人に寄り添ったデザインをできているのが魅力」と話



*10 これぞ、昭和レトロ大好きな小池晶子の真骨頂！東京時代の装飾部の経験を遺憾無く発揮し、形になった「夜見市」の風景。



野良デザイナーの心地良い手仕事

福島デ、コラム

執筆：澁谷和之（澁谷デザイン事務所）

すのは、県庁通りにある創業150年の眼鏡店「OPTICAL YABUCHI（オプティカルヤブウチ）」を経営する藪内義久さん。同じ通りある「ニューヤブウチビル」と「ノトリビル」をリノベーションして店を誘致するなど、商店街を盛り上げる活動を行っている。小池さんとは「夜見市」のほか、福島市の「民家園」で開催したイベント『FOR座REST（フォーザレスト）』などで、ともに活動してきた。

また、小池さんはニューヤブウチビル3Fの「オオマチギャラリー」で個展『物産展（2024年）』を開催するほか、ビル内のさまざまな店舗との関係も深い。ビル3Fの「食堂ヒトト」のフラッグや、ビル2Fの「本と喫茶コトウ」のショップカードに吾妻山姫だるま、「リトルバード」の照明看板など、ビル全体が小池さんのデザインの空気感で覆われている。

フィクションの世界を立体的に作ってきたからこそ、体で体感させてくれる小池さんのリアルなデザイン。建築の視点からだけでは無い空間デザインの意識は、今のまちづくりにも、とても必要なことなのかもしれない。



*13



*14



*15



*11



*12

単店舗のデザイン・ブランディングを担うデザイナーは数多くいるが、小池さんのようにビルに入居するさまざまな店舗と関係性を築きながらデザインできるデザイナーは、そうそう多くはないと感じる。単なるデザイナーとしての立場だけではなく、普段からビルのお客（消費者）としての小池さんの姿があるからこそ、こういった関係性での働き方が成り立っているのだろうと想像した。

小池晶子さんと初めて会った福島取材
初日、まずはお昼ご飯でも一緒にしましょ
うと向かった先が、中ノ沢の温泉街にあ
る、カツ丼が名物メニューの小西食堂だっ
た。そこで、小池さんは迷わずカツ丼を
注文し、一方で僕は、午後からの取材に
向け、食べ過ぎて眠くならないようにと、
軽めのラーメンを注文した。

初めて会って、まだほんの1時間も経
たない関係のなかで、小池さんは「ここ
の食堂の名物はカツ丼なので、もし良かつ
たら一切れ食べますか？」と言って、カツ
を一切れ、初対面の僕のラーメンの器に、
そっと置いてくれた。「若い頃はペロッと
食べられたけど、もういい年なので、最
近はカツ丼全部は食べ切れないんですよ
ね」と一言添えて。

その何気なく、自然であり、嫌らしく
もない彼女の一瞬の所作と気遣いには、
この土地で普通に暮らし、その土地で普
通に大事にすべきものを理解している人
の心地良さがあった。

その心地良さや安心感のようなものは、
小池さんが東京から地元に戻ってきた当
時から、家族のように可愛がってもらい、
さまざまな仕事に繋がるきっかけをも

でもあり、今現在福島で精力的に活動し
ている高木市之助さん(P84)や、西山里
佳さん(P85)とも、既にデザインの現場で
つながっている。特に、高木さんが関わ
る『Igotu』(P112)のプロジェクトにおい
ては、遺影の記念撮影スポット(P115)の
デザイン・制作やイベント会場美術など、
仕事と遊びの境界線を飛び越え、自由に
楽しみながら関わり合っている印象があ
り、その姿勢や状況が、とにかく羨ましい。

それら仕事と暮らし・遊びの境界線を
飛び越えたような、心地良いデザイナー
としての在り方は、もちろん小池晶子と
いう人がもつ人柄があつてのことかと思
う。だが、それよりも、彼女の屋号であ
る「手作業」の一言が表しているように、
彼女の手一つで何でも形作ることができ
ることの強さ、そして、その明快さ・わ
かりやすさに依るものだと思うのだ。

なんでも頭で考え、机上で空論を展開
しがちなデザイナーの性を覆すかのよう
な、現場の説得力・強さを、小池さんは飄々
と手を動かしながら僕らに伝えてくれる。

福島取材を終えた日の夜の懇親会の席
で、小池さんは僕に「私は、『東北デ、』の

らったという「あんぎい果樹園」のご家
族(P65)にも感じた。そして、それは、
福島市の「ニューヤブウチビル」「ノノト
リビル」の仲間の方々との何気ない会話
ややりとりのなかにも、一貫して感じら
れたものだった。つまりそれは、青森の
デザイナー・豊川茅さん(P16)の言葉に
もあるが、ごくごく普通の「日常」になっ
た、静かなクリエイティブの安心感であ
り、強さなのではないかと思うのだ。

今、経済産業省が提唱する「インタウ
ンデザイナー」という、デザイナーを新
しく定義する言葉があるが、一つの町や
地域に根付くデザイナーに求められる気
質として挙げられるのは、「デザイナー」
としてある前に、ごくごく普通にその土
地の「生活者」であり、「消費者」である
ということなのではないかと、僕はこの
『東北デ、』という出会いの旅を通じて再
認識している。そして、そのごくごく
普通な生活者としての心地良さや、力
強さを体現してくれている一人が、小池
晶子という、一人のデザイナーだと思う。

そんな小池さんは、『東北デ、』の仲間

デザイナーの皆さんのように、ブランディ
ングとか、ディレクションとか、そういつ
た領域でのデザインには至っていないの
で、今後はそういった部分でもデザイン
していけたらと思うんですが、どうした
ら良いんですかね……」と尋ねてきた。

その問いに対して、その場ですぐに僕
からの回答はしなかったかと記憶してい
るが、その後の僕の回答としては、「小池
さんがブランディングとか、ディレクショ
ンとか、そのような耳障りの良い言葉を
語る必要は、全く無いし、そういう小
池さんの姿はあまり見たくない」の一言
でしかない。

暮らしながら、手を動かすということ
は、ある意味、東北の土地に生きてきた
先人たちが、藁を手で編みながら暮らし
てきたことのようなもので、毎日がト
ータルディレクションであり、毎日がその
土地らしさを引き出し、伴走するブラン
ディングだとも言えると思うのだ。

小池さんは、自らのことを「野良デザ
イナー」と呼ぶ。そんな野良なデザイナー
が、従来の表装的なデザインを丸裸にし、
泥だらけにしてくれるような、手作業・
手仕事を勝手に期待している。



福島デ、| 小池晶子

福島県福島市生まれ。短大で空間デザインを学び大学に編
入学、立体造形を学ぶ。映画の美術装飾にを11年携わり数々
の作品に参加。2014年福島市にUターン。屋号を「手作業
小池晶子」として会場美術・木彫・デザインなど紙ものから
空間まで幅広く活動。手を動かし、一つ一つの作業を積み
重ねてできるものを生業とする。



* 16

デザイン・制作を担当した「涅槃スタグラム」という遺影
の撮影記念スポットに、自ら顔をハメる小池さん。公開
デザイン討論会の会場にインパクト(電動ドライバー)を
使って、このブースをサクサク築き上げていく姿には
シビれた!



パンとパンまつり記念ブローチを作ったという、
自作自演の「くまのパンまつり」の様子。なんでも
やっちゃうこの姿勢こそ、まさに「デザイン百姓」!





『日本海篇』 2025.1.26 秋田市文化創造館 [秋田市]



『太平洋篇』 2025.2.22 STUDIO080 [仙台市]



『東北デ、』 公開デザイン 討論会

2024年度の『東北デ、』では、2019〜2024年に参加したデザイナー7名（P5〜6）と、2024〜2025年に新しく参加したデザイナー16名（P8〜9）、計13名による「公開デザイン 討論会」を開催しました。奥羽山脈を挟んだ2都市を会場とし、「日本海篇」と題した秋田市の会場（秋田市文化創造館）に青森・秋田・山形のデザイナーが、「太平洋篇」と題した仙台市の会場（STUDIO080）に岩手・宮城・福島のデザイナーが集結。各討論会は第①部と第②部に分け、第②部ではデザイナーと、デザイナーと共創する自治体職員の方々のトークも展開されました。

ということで、『東北デ、』がこれまで大切にしてきた「デザイン百姓」という言葉を軸に、交わされた言葉の一部をここで紹介します。「東北で、デザインするということ」について考えを深め、東北の地で、広義にデザインを研鑽していくきっかけになれば幸いです。



2025.2.22 STUDIO080 (仙台市)



2025.1.26 秋田市文化創造館

取材：佐藤春菜
写真：伊藤隆宗（イトウタカムネ写真事務所）

公開デザイン
討論会
第①部

『東北デ、』公開デザイン討論会の第①部では、デザイナーが中心となって「東北で、デザインするということ」について語り合いました。



誰のためのデザイン？

澁谷一さて、自分には5歳の息子と2歳の娘がいて、朝の時間がなくて、保育園に持っていくおむつ10数個に、油性ペンで子どもの名前を書くという仕事があるんですが。あるとき、僕の妻が「お父ちゃん、おむつにキャラクターのイラストって要る？」って言うんですよ。

たぶん、おむつにキャラクターのイラストの印刷は要らないんです。これ誰のためのイラスト？ 誰のためのデザインなの？ って。

保育園で、ほかの子のおむつと区別するために、名前が識別しやすいおむつを考えるのであれば、名前を書く欄がおむ



澁谷和之 [秋田]

つにデザインされている方がいんです。たぶん、おむつにイラストがあっても誰も喜んではないかもしれない。店頭でおむつをたくさん売



るためのデザインとして、おむつが梱包されている袋にキャラクターのイラストをデザインするのはわかるけど。一つひとつのおむつにキャラクターのイラストは要らないのでは……という私の妻、主婦の目線ですね。

こういう視点を、日常的にみんながもてば、たぶんおむつのデザインは変わる。

4色カラー印刷をやめて、1円でも2円でも安くする社会にできる。たぶん、まったくキャラクターがプリントされていないおむつがデザインされたら、めっちゃ売れますよ。

でも、所謂デザイナーといわれる人たちは、まだまだおむつにグラフィックをのせたがるんです。

富樫一私もそうだと思いますよ。デザインのことを考えたら、プリントをどんだんなくしていった方がいい。私はデザインって引き算で



富樫シゲトモ [山形]

あって、究極まで突き詰めていったら、そこに余白ができるんで、その余白を遊ぶことがすごい大事だと思うんですよ。たとえばおむつも、そぎ落としていたら何もなくなって、でも毎日おむつを替えるお母さんが、ちょっとほっこりするような言葉が書かれてたりだとか、今のうんち指数、星5つみたいなの(笑)、そういうのがデザインな気がする。

洗練されたものが 正解ではない

後藤「『かみこあにプロジェクト「P21」』は、予算が4月くらいに決まって、計画に沿ってやっていくから、会期中で作品などが追加されていくってことは少ないんですけど、「会場にちょっと変わったものが置いてあるんですけど、これ何ですか？」って、質問を受けたんです。

隙あらば自分のものを売り出すお父さんがいるんですよ(笑)。木を彫ったり、焼き目をつけたりして。何日かを経て上小阿仁村に行くと、受付に置いてあったりするんです。このはみ出し方(笑)。「P21」普通であれば、デザインをしていると、基本的にはジャッジする。要らないもの



後藤 仁【秋田】

と要るものを選択するという仕事をさせられると思っんですけども、それで洗練されたものとか、人に伝わりやすいデザインになっていくん

だけれども、今お話したお父さんのようなクリエイティブテイ、創造性を見せられたら、これが大切だと思ってちゃったんですよ。だから、「ああ……、いいですよ」と。私自身、ディレクターだから、「これは、もうやめてください」って言える立場なんですけどね。

澁谷「やめろって言った方が楽だよ。後藤「そうそう。こちらがやめろって言うても、もう自分のやっていっていることをシンブルに見せたいだけなんで、村の人がこうやって自分の創造性で人と関わろうとしている状況やモノが、たぶん一番大切



*1

だと思うので、これはもう受け入れて、もう何も言わない。知らないふり(笑)。地域を盛り上げるといふか、発展させるみたいなときに、大きな予算や制度とかでガツリ変えるみたいな進め方の方が、もしかしたらやりやすいのかもしれないんだけど、このお父さんが行動・表現しやすい空気感を作るとか、ちょっと背中を押してあげるとか、そういうことの積み重ねが、たぶん、町とか、住んではいるエリアにとって、とても大切なかなと思った、というお話でした。

夢中の強さ

佐々木「俊文書道会」という団体が八戸市にありまして、そこに所属している子どもたちの多くは、障がいをもった子たちで、『凸凹の書』は、彼らの作品をまとめたものです。いろんな状態の子がいるんですけど



佐々木 遊【青森】



写真：向田昌弘

も、隔てなくまず書を書かせるというところからスタートして、主宰の西里先生という方が、「いいよ」「いいぞ」「行けー」「そこだー」みたいな感じで、声をかけながら書いていく。

澁谷「何を書いてもいいんですよ。佐々木「そうですね。自分の思った、今の気持ちを書いてみてっていうふうなものです。『ゴジラ強い』とか。澁谷「これも僕好きなんです。『ぼくの中にライオンがいる』」。

佐々木「この書を書いた蛇平くん、秋田公立美術大学が主催している『全国高校生何でも、アリ。Creative Award 2024』に応募して、銅賞を頂きました。蛇平くんは筋力が低下していく病気をもっていますが、月一で訪問書道をしているんですね。」



*3



*4

柳澤「『全国高校生何でも、アリ。Creative Award』の審査員を務めている、秋田公立美術大学の柚木准教授は、「多くの作品を審査するときに、評価されようとして提出されたものではなくて、心から書きたい、作りたいと思った気持ちが伝わってくるものを応援したい」とおっしゃっています。澁谷「さっきの上小阿仁村のお父さんもそうだよ。何か表現したいとか、やっぱりきちんと見てほしいみたいな気持ちが誰しもあって、それをただきちんと見て感じ合うことって、当然のようなことでありながら、意外にできてない。」

地域のデザインとは？

柳澤「『東北デ、』という言葉は、地域を制限する、くくる言葉だと思えますが、『地域のデザイン』という言葉はこれからどういう意味をもっていくのか、吉野さん



司会・進行：柳澤 龍【秋田】

人口が減っていくことを
大前提として

後藤一かみこあにプロジェクトをやっていると、本当に人が減っていつていつてんだなっていうことを感じるんですが、その状態って、秋田市とか、都市といわれるところと地続きで、私たちはもう少し意識を変えて、自分が作ることで人に関わったり、物事をささやかでも何か起こしていくことが、本当に必要なときなんじゃないかと、すごい危機感を感じながら生活しています。



作品：空気ひとし



吉野一デザインする以上、地元とか社会がこっちに行った方がいいよねっていうふうに、ちょっとは導きたいと思っっていますが、地域の特性としては雪がすごいものですから、人口が減ったら家は潰れていくだろうなと思って、潰れないようにするのも限界があって、家が潰れている風景が想像できつつある。

でも、「あ、潰れた、大変だね」ではなくて、潰れた家に花を置いてみたりとか、なんかもうそっちを考えていくほうがいいかなとか。もう人口増やすのは無理だ

から、減る前提で何をしたら生活が楽しくなるのかなとか。なんかそういうことを比べると、昔より減るから悲しいっていう状態があると思うんですけども、比べなければ、落ちてないっていうか、下がっていないというふうになるので、私も含めて地域の人が、今を楽しめるようにデザインで加担していったらなと思っています。





自分たちで考える
作ったことがスタート
本気じゃない仕事はしない

高木一僕はほぼ100%いわきの仕事で飯を食わせていただいでいて、本当にいろんなことをやらせてもらってまして、個人の方からも、イオンモールさんからも仕事をいただいたり、健康診断のお知らせの封筒を作らせていただいたりとかですね。ヒップホップのジャケットを作ったり、この間は高校の校章のデザインの手伝いもさせていただきました。こんななかで今回、僕がいつも大事にしていることってなんだろうって振り返って見たときに、「自分たちで考える」っていうことを、僕はいつも考えているなと思いました。



高木市之助 [福島]

というのは、ブランディングのセオリーとか、デザインのセオリーみたいなものが巷にくさんあります、当然勉強に



「igoku」フラッグデザイン・制作は小池晶子さん (P60)



*10

もなりますし、参考にはさせていたくないですけども、やっぱりそれに当たらないケースっていうのが、自分たちの地域で生きていると多々あります。何かをひとつの形としてブランディングするみたいなことって、逆にそれやんない方がいいんじゃない？ みたいなことも多々あって。そういうときにやっぱりセオリーじゃなくて、自分たちがどうありたいか、どう見せたいかっていうのを、

自分たちなりに、自分たちで考えて形にするっていうことを、僕はすごく意識しながら仕事してるなと思いました。あとは、作って終わりじゃなくて、作ったことがスタートだと思って、デザインって、世のなかに出てから初めて人の目に触れて機能するものだと思うので、デザインができたから、はい、終わりましたじゃなくて、それがどういうふうに動いているのか、働いているのかっていうのを、一緒に伴走しながらですね、*10『goln』『P12』なんかまさにそういう例だと思っんですけども、できて、見せて、何かが起きて、その何かが起きたことによって、また何かが起きてみたいな感じで、自分たちもゴールが見えないし、狙ってやったんじゃないけど、結果的にすごくおもしろい取り組みになったかなと思ってます。

3つ目は、ちょっとこれかっこつけすぎですけど、本気じゃない仕事は、なんかあんまりしたくないなあっていうことです。ただ、やりますけどね。いずれ本気になるかもしれないとか、あの、この辺ちょっとすみません。ちょっと調子乗っちゃいました(笑)。

すきと弱さ

西山一今回、私って何を大事にしてデザインやってんだっけ？ ってめっちゃ考えさせられて。今ちょうどデザインを仕事にして20年という節目だったりするのですが、これだなと思ったのが、「すきと弱さ」でした。すきというのはライクの好き、ラブの好きもあるし、隙間のすきという意味もあります。

福島もある意味では震災の後、原発事故があって、弱さを抱えた地域だと思っただけで、でもその弱さのなかに、めちゃくちゃ魅力があったり、やっぱり人も弱さのなかに魅力があるっていうのは、いつもすごく感じていたので、そういう意味で弱さを「隙」として「すき」になれるような、そういう社会とか、周りになつたらいいなっていうことが、私自身が大事にしていることなんだなと思えました。



西山里佳 [福島]

後ろに、『さあ、行っという。』というポスターを貼らせていただいています。これが私まさに「すきと弱さ」を形にできたんじゃないかなというプロジェクトで、18歳が巣立つときに5万円を支給するっていう市の事業なんですけど、市民の方々に応援メッセージをもらって、ポスターを作ってるんですが、たとえばこの高校生の写真は、今回は支援学校の生徒さんたちに出させていただいて、この子た



*11

ちには障害といわれるものが社会としてはあるのかもしれないけど、個性はめちゃくちゃおもしろくて、それをかわいく表現できないかというので、こういうポスターができました。

柳澤一会場からの質問で、「西山さん、素敵なポスターですね。これを作ったことよっての効果ってあったと思います。町に戻ってくれたとか、町のPRになったとか、デザインの社会課題の効果を見える化できるといいですね」ということ



生活は
生きていることの
表現

澁谷一 西山さんは「粒粒」と言う場所を地域に開いて、みんなが表現できることを大事にしていると思うんだけど。

西山一 私がやっている「粒粒」という場所は、粒と粒自分が粒であることを自覚してほしいなと思って名づけたんですけど、高齢者、福島、被災地、若者って、言葉が大きくなると、個人が見えなくなっていくって消えていくものがあるけど、実は粒。粒として自覚して、その粒をどうやって育てていくのか、粒ぞろいにしていくのかみたいなことを表現したいなと思って。

それを、クリエイティブとかアートとかデザインとかって結構敷居が高いつて実感してるので、もうちょっと柔らかく「表現」という言葉に置き換えたいなと暮らしてる私たちはみんな、生きていることは生活の表現、生活が生きていること

を表現したいなと思って。それを、クリエイティブとかアートとかデザインとかって結構敷居が高いつて実感してるので、もうちょっと柔らかく「表現」という言葉に置き換えたいなと暮らしてる私たちはみんな、生きていることは生活の表現、生活が生きていること



*12

思うんですよね。地域の方から応援メッセージをもらうときも、「あなたが18歳のときはどうでしたか？」っていう質問を絶対するんですけど、今の目線ではなくて、18歳のときの気持ちを思い出してもらうようなことをなるべくして。役所の方にも同じように18歳の気持ちを一番に考えましょう、ちょっと想像してみてください。みなさんいつも言うようにしてました。みなさん想いがあるので、わかってくれて。コピー案をいくつか出したんですけど、「さあ、行つといて。」にしましょうってなりました。

で、さっき「デザインって始まった終らない」という話があったんですけど、このポスターのデザインが終わった後について考えていることはありませんか？
西山一 終わってない……まさに昨日、今年のポスターが貼られて、毎年18歳が育っていくので、「終わらない」はまさに本当にそうだなっていうのと、このポスターのポイントも、「戻ってきてって言わない」っていうのが大事なことから、そうなるよ、それを言わずに、でも実際はちょっと、こういう町に戻ってきたいなって思ってもらえるようなコミュニケーションを、20歳になっても、30歳になっても、し続けるというのが、故郷の責任だなと思うので。ポスターの事業が始まった頃の18歳が今20歳で、この後どうデザインしていくか、私も考えなきゃなあって思っています。

柳澤一 普通、役場だったら「行かないで」というメッセージになると思うのですが、それがなぜできたんでしょう？

西山一 役所のみなさんが、想いを伝えたっていうのが一番あって、その想いを伝えるにはどうしたらいいの？ っていうところを真摯に考えてくれたんだと



との表現だから、冷蔵庫の余りものでご飯を作るのも表現っていうことをすごいしつこく言ってるかな？ って感じですよ。澁谷一「粒粒」という場を作って、何年ぐらいなんですか？
西山一 4年ですね。
澁谷一 実感というか、感触は得られていますか？
西山一 どうでしょうね。でも今、福島県の浜通りってアートの事業がすごい増えていて、うれしい反面、最初はそういう場所がなかったから、私は場を開きたいなと思って「粒粒」を作ったんですけど、今はあんまりイベントとかやってない。それはやっぱり役割として、ほかの人がやっているから。そうやって、町のなかでの役割とかも、どんどん変化するじゃないですか。「粒粒」をどうしたらいいのかが……、今すごく悩んでいます。

大切にしているのは「物語」

小池一 昔も今も、学生の頃かもしれないんですけど、大事にしているのは「物語」で、デザインするときに、対象のバックグラウンド、土地とか歴史とかも含めて、



小池晶子【福島】

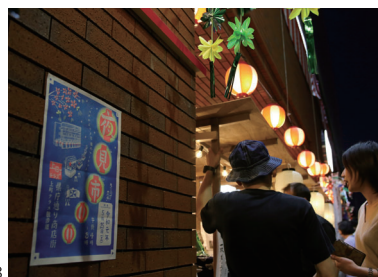
て、そうした「物語」を見つめることからデザインを始めてます。前の映画の仕事は、脚本の物語をどう美術で演出するかっていう考え方があって、それも自分の根になってます。

そして、その物語の伝わる見せ方を考えて、ものを作ります。現実にはできないこととか、違う時代のことでも、デザインによって形にして感じてもらうことができると思います。そこにある物語に気づき、身近な現実の世界が愛しく輝いて見えることが私の理想です。学生的时候は、自分だけが楽しくなければいいって思ってたんですけど、今はだんだん周りの世界、地域とか、暮らしている場所とかで、周りの人もそう感じてくれたらいいなって思うようになりました。

想いか目指していることを聞いて、それを観察して、わからないときは、相手のフェイスブックを覗いてさかのぼって読んでたりとかも



柳澤「小池さんには「デザインの幅が広いですね」というコメントが多くて。先ほどの屋台の写真をもう一度見せていただきたいのですが。」
小池「これは「夜見市」*13「P64」という、福島市の県庁通り商店街、かつて闇市でにぎわっていた時代があった場所で、当時を思い出せるようなナイトマーケットを開くというイベントです。」



いうのは、もともと映像の仕事って、こういう屋台の飾りもするし、看板を描いたりもするし、偽物の張り紙とかお酒のラベルを作ったりもして、全部自分でやってたんで、それは私にとって自然なんですよ。いろいろやってみることが普通。

*13

デザインが通用しない

阿部 一去年、遠野市の観光施設のリニューアルがありまして、そのグラフィック関係の仕事に関わって、食堂のサインのデザインをしました。木目調の木の質感のある素敵な空間にリニューアルしたので、サインも空間を邪魔しないように、こういう地元の木を使って、動線や大きさもすごく考えて、遠野なので、男女のシルエットのイラストをカップの形にしたり、遊び心も加えたデザインにしたんですね。

それで、その食堂に僕はよくご飯を食べに行っているんですけど、半年ぐらい経ったときに、^{*14} こういう感じになってたんです。



*14

想像するに高齢者のお客様さんも多いので、現場のスタッフの方がもっとわかりやすいものにしたと思うので、自分たちで修正したの

だと思っ

たぶん、僕

が仙台でデザ

インをして

たったら、この

状況を見た瞬間

に、すごくやる

せない気持ちと

いうか、「わかっ

てない！」みたいな感じに思ったと思っ

たんですよ。でも今、遠野でデザインする

ようになって、この状況を見たときに、

その現場のスタッフの方々の愛を感じる

んですよ。逆に何にもわかってなかった

のは自分だなんて思う。反省したんです

よ、すごく。



阿部拓也 [岩手]

すごく反省しているんですよ。だから僕

はこのままでいいかなって思ったんです。

澁谷「デザインの敗北を学びましたと。

阿部「うん。敗北です。」

澁谷「デザイナーって何なんだ？ って

いうことですよ。現場の人たちの方が

本当のデザインをしている場合がある。

この前、病院に行ったときのこと。エ

レベーターの「開ける」と「閉める」の

ボタンの文字って似てるじゃないですか。

パッと見て似てるから、間違っ

て開けて、間違って閉めちゃうって、

パンって人がドアに挟まれてしま

いそうなる事故って日常的にあると。それを

病院のスタッフの人たちはわかって

て、そのサイン（デザイン）が機能してないこ

とがわかってるから、その下に別のサイ

ンを、たぶん看護師さんとかがデザ

インしてるんですよ。

ね。そういった

シーンは日常の

なかにすごいあ

る。

阿部「見た目的

に美しいかと

か、ユニークか



*15

というところ以前に、やっぱりそういうっ
た、これは何をやるものなのかっていう
ところを理解しないと、本当にそのデ
ザインって機能しないんだっていう。
本当に反省として、今日この場でさらけ
出しました。

あとですね、産直とかで、ジュースとか、
ジャムとか、よく売られているじゃない



*16

ですか。そういうところの現場って、こ

ういった感じなんです。最近の僕と

しては、こういうデザインの方が、もう

めちやくちや信頼できるんですよ（笑）。

特にあの右側のトマトジュースなんて、

もう潔すぎて。「俺の作ったトマトジュ

ースちょっと1回飲んでみる！」みたい

な感じに言ってるようにしか思えないん

ですよ。きれいに整えられた、いわゆるデ

ザインされた、立派なラベルよりも、こっ

ちの方が、なんか最近の僕は買いたい気

持ちになっちゃう。

澁谷「こういうの見せられると、自分の

存在意義がわからなくなりますよね。で

もおおしそなんだよね。

阿部「それで、もうひとつ究極なのが、

最近見つけたこれ。^{*17} ラベル貼ってないん

ですよ。貼り紙に「お安くしたいのでラ

ベルは貼ってません」。最高！って思

いました（笑）。買いました（笑）。やっぱ

り味もめちやくちやおいしいんですよ。

本当にここに書いてある通り。自家栽培

で、添加物一切入っていない。裏のラ

ベルを見てもリンゴしか書いてない。デザ

イナーって何なんだろうなと思

ました。……というお話でした。



*17

澁谷「さらけ出しまくっちゃったね。阿

部さんはたぶん、この『東北デ、』に巻

き込まれて、いい意味でぐちゃぐちゃに

されたデザイナーですね。本当にいい意味

で、こういうことを愛せるようになった

と、僕は思ってるんですけど。

阿部「一考え方が本当に変わってきて

ますね。ただそれが、今の時代だったり

とか、この先の時代にとって、正解な

のかわからないです。

だから、今の自分のリアルな感覚を

みんなに伝えることで、自分のなかで

何かを学びたいなあっていう。今、

そういう気持ちになってますね。

澁谷「通用しない」という感覚、僕も秋田でたくさん味わってきました。比較としては、都市、首都圏だったり、仙台の街なかだったりでは通用してたグラフィックデザインが通用しないっていう。さっき阿部さんが、「お安くしたいのでラベルは貼ってません」というリングゴジュースを買っちゃいましたって言うんですが、たぶんデザイナーってちゃんと消費者じゃないといけないと思うんです。消費者じゃないのに、デザインをしてしまっている場合があって。

阿部「商品を買うときに、デザインはイマイチだけど、味がいいから買っているっていうのはあるけど、味は悪いけどデザインがいいから買っているというパターンはないかと思って。だから本当にデザイナーってなんなんだろうなって。

スズキ「僕は東京で20年以上仕事をして、5年前に岩手に戻ってきた人間なので、阿部さんの感覚っていうのはすごくよくわかるし、阿部さんが今こうやってこっち来て、今までのものが『通用しない』っていうのは僕もすごく感じて。自分を説明するために「東京でやってきましたとか、長くやってきましたとか、デザイ



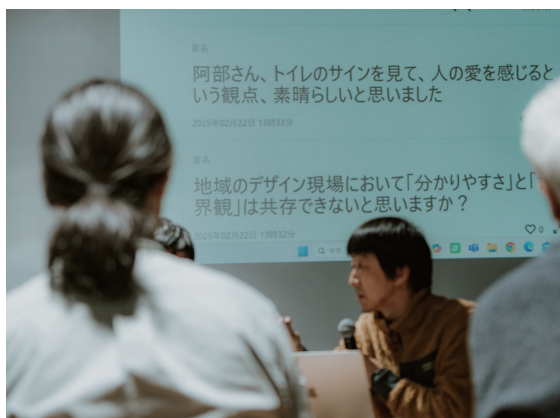
スズキケンイチ [岩手]

ンとはこういうものですよ」みたいなふうに話をすると、デザイナーを欲している人からすれば、コミュニケーションがしやすかったりするんじゃないか？とか、アートディレクターってなんだ？みたいな感覚からすると、やっぱり今までの言語が通じなくて。そうすると、今まで自分が、とても表面的なことをやってきたような気がしてきて。

あるお客さんが、デザインを変えたいって僕を呼んでくださったんですけど、そこに奥様がいて、「これまでデザイナーとかに頼んだことがないから、こんな、旦那さんが作ったカッコ悪いパッケージしかないのよ」っておっしゃって、商品を見せてくれたんですね。麴を使った漬物とかそういうやつだったんですけど。でも僕はそれを見たときに、産直的なパッケージなんだけど、もしこれが銀座のGINZASIXとか、そういうハイソなところ

ろに置かれてたら、たぶん全然見え方が違うんじゃないかなって思ったんですね。だからパッケージがいいとか悪いっていうのは、置かれている状況にもよってくるし、もちろん先ほど阿部さんがおっしゃったように、むしろこっちが信じられるという消費者の視点もある。

僕なんかは、リングゴジュースを作っている人から、「これはほとんど傷んだリングゴを使って、二東三文で作ったジュースだからたぶんおいしくない」みたいな話



を聞くと、おいしいジュースを探すのってすごい難しいんだなあとと思って。パッケージじゃわかんないっていう思いもありますけど。

デザインするのは デザイナーじゃなくて、 注文した人

スズキ「デザインするのはデザイナーじゃなくて、注文した人だと思っています。さっきの話にも出たと思うんですけど、やっぱりデザイナーさんだから全部やってもらえるとか、まるで正解を知っているかのような気になるんですけど、あるいはそれっぽいものを作ることまではできるし、今はたぶん、デザイナーじゃなくてもできるんですよね。だけど、最終的に自分の商品に責任をもって販売したり、売り続けたり、作り続けるっていう方が、結局責任を負うことになるので。やっぱり、その方々がデザインをしているんだと、僕は思っています。

澁谷「デザイナーが、クライアントの話聞いて、話をしていくと、クライアントが、本当の自分をわかってくる。だから

ら僕らって、もう壁打ちですよ。ただただ壁になる。そうすると、さつき高木さんも言ってましたけど、マジな仕事本気の人が、そこでわかってくる。そこをしつこく聞くっていうことが、デザイナーに足りてないのかなって、僕自身も思うし、すぐ手を動かしてしまいうことがデザインって思いがちだけど、すぐロゴマークとか作っちゃいけない。すぐ色を決めない。ただ話を聞いているっていう時間をもっと少し贅沢に取らないと、たぶんデザイナーの自己満足の何かが生まれてしまったりする。そしてデザイン費は



高いっていう。誰が幸せになるの？ っていう状況になってしまふのかなという気がしますけどね。

スズキ一デザイナーさんは、経営とか、社長さんとか、会社のことをよく学んで、経営者の方、もしくは頼む方も、デザイナーのことをちょっと学びながら、お互い歩み寄るっていうのが、たぶん理想の形かなとは思いますが。

柳澤一デザイナーではない僕らは、どうやったらデザインを学べますか？

スズキ一この場合のね、デザインっていうものの意味がすごく広いので、見た目を整えるっていうデザイン

ンもありますし、そもそも、やりたいことのプロジェクトとか、その考え方も言えるので、どこを切り口にするかで変わっちゃうんですけど。

たとえばさつき阿部さんがパッケージの話してくれたので、見た目の話からすれば、世のなかにどんなパッケージデザ



インがあるのになって探すだけでも勉強だと思えますし、自分の競合他社、似たようなジャンルだとスマホで検索できまじ、売り場、どこに売るのがなくなって考えたときに、自分の商品を持って行って、それが目立つのかな、目立たないのかなとか。たぶんやりようはいくらでもあるので、これは正解とは言い切れないんですけど。

柳澤一たとえばリンゴジュースを見てき

ました。これが気に入ったんですっていうものを伝えればいいんですかね？

スズキ一そうですね……、ただ、好き嫌いで言うんだったら、正直たぶんデザイナーの半分ぐらいしかできてないと思うんですよ。好き嫌いでやるんだったら、デザイナーいらなくなってしまうし、やっぱり、リンゴジュースが誰のためにあるのかな？ とか、そのお父さんお母さんの代が終わった後、今、娘さんが手伝おうとしてるとか、孫の代までこのリンゴの木は残したいとか、未来とか、あるいはこの地域とかにとって、これは何だろうな？ とか。1年間だけ目先で売れるパッケージ作ってくれて言うんだったらそれでいいと思うし、デザイナーに失敗したら半年ごとに作り変えるよとかだったら、好き嫌いでどんどんやってもらって結構なんですけど、変えるって大変なことなので、腰据えて、考えて、でも好き嫌いだけじゃないところで、さつき澁谷さんもおっしゃってましたけど、壁打ちが必要だと。一緒に深めていくってことの方が、長い意味での納得が生まれるのかなって思いますけど。

ものづくり、環境づくりと並ぶ、人づくり

伊藤一私は今現在、宮城県仙台市青葉区に在住ですが、静岡県出身でして、高校生までは静岡で育ち、進学で東京へ。広告代理店の首都圏営業本部に勤めて、転勤で仙台にきました。その後、東日本大震災が起こりまして、その際に一度首都圏に戻るか、仙台に残るか、周りから帰って来たらどうかとさまざま言われたんですけども、両親が宮城県出身でして、自分なりに愛着ですとか、子どもの頃、夏休みに宮城のおいちゃんおばあちゃんのうちへも来ておりましたので、震災があってもすぐじゃあ戻る……という

ことは、あまり考えなくてですね。

仙台でデザインという仕事をすること自体も、何百年に一度の巡り合わせの機会なのかも



伊藤典博 [宮城]

しれないと捉えまして、仙台に残り、2012年に合同会社スカイスターというデザイン会社を設立しました。12年ほどデザイン会社を運営しまして、今はです、会社のスタッフと継続してデザイナーの仕事が続けながらも、デザイン研究×教育×制作ということを東北地域で実践、悪戦苦闘中です。

今、仙台市内の仙台青葉学院大学・短期大学で、デザイン領域の研究と教育というものに取り組んでいます。私が在籍



大学でのフィールドワーク・授業風景／株式会社永勘染工場（仙台市）

している大学は美術大学ではなく、デザイン学部や美術学部を有している大学でもありません。おもにビジネス系の学科のなかにひとつのデザインコースがありまして、その学生と一緒に学んでいます。ですので、広告デザイン系に進む学生もいらっしゃいますけれども、進路はさまざまです。

卒業後、デザインを生業としない学生のみなさんが、限られた時間で、デザインというものに触れて、知識を携えて社会に出て行くということに価値を感じて



大学でのフィールドワーク・授業風景／八木山陶芸倶楽部（仙台市）



います。デザインを軸にした、東北地域の発展、魅力づくり、賑わい創出みたいなところに、一生懸命、悪戦苦闘しているところなんです。

湊谷一伊藤さんはスカイスターという大きな組織を作られて、僕だったら先生にならないで、もっと稼ぎたいと思っちゃうと思う(笑)。でも、そこで教育のフィールドに自分を振ったっていうところに、伊藤さんの魅力を感じたんですが、商業デザインに対して飽きたとか、あったのでしょうか？

伊藤一商業デザインを長くやってきたわけなんですけれど、デザインイコール商業デザインとは、昔からあまり思っていないで、むしろそれよりも、周辺にある要素とデザインっていうのは、さまざまつながっているということはすごく感じてきたので、商業デザインが飽きたとか、そういうことでは、全然ないんですけれども。

ものづくり、環境づくりと並ぶように、人づくりみたいなものもやはり同じように大事というふうな意識、感覚があまりなかったので、今は研究、教育現場にも携わっているっていう形です。

終わりと区切りを 考えるデザイン

横塚一私は「終わりと区切りを考えるデザイン」っていうのを、ここ数年大切にしています。世のなかの人口が少なくなってきた、かけられるリソースがすごく少なくなってきた、ひとりでもてるものもの量って限りがあると思っています。あれもこれもやりたいし、続けていきたいって思っているんですけど、100個のリソースに1ずつしか愛情をかけられないってなったときに、私の愛の形としてそれでいいのかなっていうのがここ数年考えていることで、始まったから絶対に終われないっていうわけではなくて、必要がなくなったらやめるとか、一旦区切るっていうことも選択肢としてフラットにもっていいんじゃないのかなっていうのを考えています。



横塚明日美【宮城】

それをなんでも考えるように



*18

なっただかっていうと、ひとつは、宮城県角田市の中学校の閉校記念誌を作らせてもらったのがきっかけでした。町の人たちのプライドとして、ここに中学校があるっていうことがすごく大事なことであったんですが、閉校が決まったら、生徒も先生も地域の人たちも、このまま悲しんでいてもしょうがないから、どうやってこの中学校と、いい形でお別れをしようっていう、終わることに対して、すごく前向きに捉えていたんです。

もうひとつは、宮城県丸森町は昔、養蚕がすごく盛んで、昭和初期の最盛期には2000戸、町の約半分の世帯が何らか養蚕をやっているっていうところでした。ですが、昨年、一世帯だけになってしまった。40代後半、町のなかでは若手



*19 佐藤ファーム代表の佐藤靖さん(右)

「養蚕を伝統として残した方がいい。続けた方がいい」と言われているんですけど、それに対して、「生業としてやっているから、稼げなくなったらやめる」という覚悟をもって。農家ってずっと同じものを続けていることって少なく、土地が変わったりしたら作物も変わる。それと養蚕も同じだよねって話をされてきました。「この土地を一番おもしろがれるのは俺でありたい」という話も

して、かっけえ！ って。これからも一緒に、終わるとか、区切っていくってことを、この町で考えていきたいなって。もちろんデザイナーなので、新しい商品が出ますとか、こういうイベントやりますっていうことにも関わりつつ、この町がちよっとずつ終わりを迎えるときに、そばにいられるようなデザイナーでありたいなと思ってます。

柳澤「終わりを考えると悲観的になりませんか？ だったら今を生きるのがいいのではと思うのですが、いかがでしょう」という質問が、会場からきています。

横塚「閉校記念誌作りのときは、私もすごく悲観的になるといふか、なんで終わっちゃうんだろうとか、まだもしかして終わらなくていいんじゃないかなっていう気持ちももちろんありましたけど、でも、じゃあ私のこの悲しいっていう気持ちだ



けど、これを存続させていくことができているのか？ って言われたらそうでもないっていう。何て言うんだろう、明るい気持ちで未来のためにあきらめるみたいな気持ちなのかもしれないです。全部を大事にしていくっていうのは難しいから、じゃあどれとどれを一緒にしたらいいのかなとか、なるべく悲しくない形にしたいっていうのが、大きいのもかもしれません。



衣食住、聞(ぶん)

澁谷「最近、秋田公立美術大学の教授であり、さまざまな境遇の子どもたちと日々向き合っている方が、これまでは「衣食住」が必要なものとされてきたけれど、この後に来る一文字は、たぶん「聞(ぶん)」だとおっしゃっています。

人の話を聞く。「衣食住、聞」。聞くっていう文字が次に来る、そんな世の中がやさしいんじゃないかなって教えてくださって。デザイナーって聞く仕事。手を動かしている印象が強いけど、足を会いに行くと、聞く仕事な気がする。デザイナーはどんなアクションして押していくイメージがあるけど、もっと聞いて待つ。待つと、きっとデザインを必要としている人たちが、クライ

アントは自分で考え始める。だから、デザインは、もっと静かになった方がいいのかなあ……、とも思いました。すごく華やかな業界に見える



澁谷和之 [秋田]

んだけど、もう少し地味に、地味に、静かに強くなっていく。

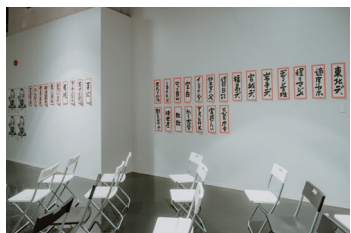
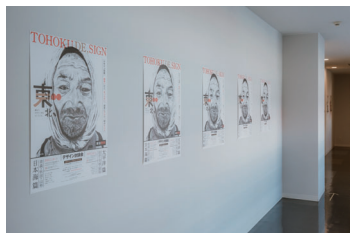
あと、「0→1」を作るっていうよりも、これまでものを見たり聞いたりして、ちよっとお手伝いするっていうくらいのものが、これから必要となるデザインなのかなって思いました。

あきらめるデザイン

澁谷「去年のこのトークの場でも話したんですが、僕は「あきらめるデザイン」が必要だと思います。なんでも便利に、スピードを速くする、大きくするという、足し算のデザインはもう終わって、できることは限られる。あきらめる。

「あきらめる」の語源は「明らかにする」というところにある。明らかにすれば、もっとシンプルにあきらめていけるはずなんですよ。

そういったあきらめる意思や強さみがないのは、東北という土地にはあるんじゃないかなと思ってる。前向きに聞こえないかもしれないけど、ポジティブにあきらめるようなデザインが増えたらいいなという気持ちがあります。





木 大 っ び

あまぐり
遊

あきらめる
吉野敏亮

考えな

ゴングロ
ん

あまぐり
遊

はじまりは人

あまぐり
遊

とんくま
なんぼ
北島
珠水

会いに行く
全

洋風手踊
ちが

TOHOKU DE, SIGN

東北

参加無料

2020.1.20 (日)	デザイン討論会	2020.2.22 (日)
岩手・宮城・福島		太平洋篇
日本海篇		



『日本海篇』 2025.1.26 秋田市文化創造館 [秋田市] 中央左：北島珠水さん(秋田県立近代美術館学芸主事) / 中央右：丹 健一郎さん(山形県金山町職員)



『太平洋篇』 2025.2.22 STUDIO080 [仙台市] 前列右：猪狩 僚さん(福島県いわき市職員) / 後列一番右：佐藤太一さん(空白実習室管理人) 前列左：面川常義さん(宮城県角田市市民) ※急遽特別登壇



公開デザイン
討論会
第②部

2024年度の『東北デ、』公開デザイン討論会のテーマは、「地域とデザイナーの共創」。討論会の第②部では、自治体職員などに登壇してもらい、どのように地域のデザイナーと共創し、プロジェクトを推進したのか、デザイナーと取り組むことで、どんな変化があったのかなどを語ってもらいました。

「山形県金山町」と「吉野敏充デザイン事務所」の共創事例



丹 健一郎さん（山形県金山町職員）



吉野敏充（吉野敏充デザイン事務所）

K-hour project

山形県金山町のプロジェクトで、モノ・コト・ヒトの魅力伝える観光文化誌『K-hour 金山の時間』や『k-hour movie』の制作、首都圏の人と町民が金山の未来を創造するデザインスクールなどを実施。訪れる人と金山との輪を広げるきっかけを育んでいる。

【丹 健一郎】山形県金山町生まれ。2011年より山形県金山町職員になり、令和5年度まで商工観光を担当。現在は福祉担当。金山の“暮らし・日常”を中心とした魅力発信等を中心とした『K-hour project』を展開。その他、未来を明るくするデザインの視点から「金山の未来」を考える『金山デ』を開催。

想いを共有したデザイナーと取り組むことで、効果が上がった

丹一山形県の新庄市にデザイナーがいるというのを知って、フリーペーパーのデザインを頼んでみようと思ったのが、吉野さんとの最初の接点です。

金山町は、人口5000人を切った町なんですけど、その町の魅力が一番顕著に表すのは「地域の人」なんじゃないかなと思っていました。来た人が町民と知り合うことで、その地域の観光をより感じてもらえるんじゃないかと思って始めたのが、金山の時間『K-hour project』です。



*20 写真：渡辺 然（ストロボライト）

最初に本を作ろうと予算要求をしたんですが、3年ぐらいは予算がつかず、何回もあきらめそうになったんですけど、がんばりました。冊子を作ってみて、一番うれしかったのは、町の人たちが、子どもたちが載ったとか、おじいちゃんおばあちゃんが載ったということ、すごく喜んでくれて。町の人たちが喜んでくれたもので、地域外の人にPRしていきたいなと思ったときに、このプロジェクトをやってきてよかったなと思いました。冊子ができた後に、吉野さんと私は『ソトコト』編集長・指出一正さんと面識があったので、関係人口のスクールをしよう、私が事務局になって、吉野さんにメンターをしていただいて、2024年度まで4年間続けることができました。この参加者のひとりが移住して、今は地域おこし協力隊として、この事業を引き継いでくれていて、すごくありがたいなと思っています。柳澤一なぜデザイナーに依頼しようとしたのか、丹さんに聞いてみたいのですが。丹一昔の行政の人たちは、チラシを作ろうと思うと、全部自分でやって、予算を削減しようとしていたと思うんですけど、



*22

私も予算がないなかで作りたいと思って、自分でやってみたときに、本職の方々の真似事ではあるんですけど、労力がわかるわけです。その労力が、自分の効率とかいろんなものを考えたときに、自分と同じ想いをもってくれるような人に託して、一緒にやっていった方が、より効果があるんだなと思ったのと、あと、予算を取る上では、その辛さとか大変さがわからないと……。よく「予算がない」

と、私も含めて行政関係者は言っているところがあるんですけど、予算を取るためには、それがちゃんと自分の血肉になって、わかってなければ、予算要求までいかないんだと思うんですね。

いつもだいたいざっくり取って、その範囲内をおさめようとする。そうじゃなくて、本当にやりたいことがあって、この人と一緒に仕事をしたいと思ったときの、対価として予算があるんだというふうには考えないと、なかなかリアルな予算にはならないですね。

柳澤一吉野さんは、丹さんと一緒にするなかで感じたことはありませんか？

吉野一—そもそも、私がUターンしてきたときには、丹くんは自分でフリーペーパーみたいなものを作っていて、綺麗なデザインではなかったけど、自分で作った感じがして、そもそももの作りが良かったというのが前提なので、向かっていく気持ちが強い状態ではあったから、その上で予算があるっていう感じはありました。柳澤一会場から、「行政としてデザインの効果測定はどうしていますか？」という質問をいただきます。丹さん、いかがでしょうか。



丹一純粋な数値ではどうしても測れない部分があって、それがたぶん継続した事業化につながらないということが多くあると思うんですけど、ただ、私が今一番うちの町でデザインを吉野さんと一緒にやってきたことで、効果としてあったのかなと思うのは、町の職員の人たちがデザイナーという人に外注するようになって



公開デザイン討論会の会場には、『K-hour』のYoutube動画にモデルとして登場した高橋拓也さん(左)も急遽登壇。彼は、「デザイナーになりたい」と、澁谷さんと吉野さんの事務所の門を叩いたという、なかなかの強者。



K-hour Project 公式HP



K-hour Youtube 映像

たということ。あと、町の公式Youtubeには動画が1本しか上がってなかったんですけど、私が作りはじめてから、今20本くらいに増えました。

誰かに伝えたいとか、伝えるための工夫、町の様子を伝えたいとか、町の住んでいる人に何か伝えたいと思うところに、デザイナーの人たちがうまく波及していけば、デザインと一緒に町のことをやるということは、広義ではすごく有益なものだというふうに考えられるんじゃないかなと思います。

吉野一私の予算は減っていった。結果そういうふうになったということ。でもよかったなと思います。

澁谷一デザイナーは見えない方がよくて、だんだん予算を減らされていって、その存在は消えていった方が、社会としては健全なんじゃないかって、吉野さんとはよく話しますよね。

吉野一もともと、印刷会社さんがデザインをセットでやるような地域だったので、それが、行政の人でもデザイナーも、これをするためにどうしたらいいか考えるっていうこと、ひと手間が生まれたっていうことは、いいことだなと思います。



P104の丹さんのプロフィールのなかに記されている『金山デ』という動き。『東北デ』の兄弟プロジェクトとして、2023年、2024年と丹さんが中心となって静かに展開している。『東北デ』のデザイナーも、地域・町のデザインの研鑽の場として、毎年関わらせていただいております、このような兄弟プロジェクトとしての展開が全国に広がってくれたらと願っている。



「金山デ」 Youtube 映像

*21 「社会や環境がよくなって、そしておもしろい」をテーマとした1999年創刊のソーシャル&エコマガジン。

「秋田県立近代美術館」と「澁谷デザイン事務所」の共創事例



北島珠水さん（秋田県立近代美術館 学芸主事）



澁谷和之（澁谷デザイン事務所）

「みんなのキンビ」プロジェクト

秋田県立近代美術館が核となり、さまざまな機関や市民の方々と連携し、秋田に暮らす誰もがアートを楽しみ、アートを通じて繋がる地域づくりを目指す取り組み。年齢や障がいの有無にかかわらず、みんなに開かれた美術館の在り方を模索している。 ※詳しくは『「みんなのキンビ」プロジェクト』で検索

【北島珠水】秋田県潟上市生まれ。特別支援学校の教員として27年間勤務し、学校種に捉われず多様な子どもたちがアートを介して学び合う活動を積み重ねる。令和4年度から、秋田県立近代美術館 学芸主事。「みんなのキンビ」プロジェクト担当として、アートを介して人が繋がり合う場の創出に取り組んでいる。

デザインと関わることで、やりたいことが明確になってきた

北島「秋田県立美術館の「みんなのキンビ」プロジェクトは、2024年度が3年計画の2年目になるんですが、デザインと関わることでやりたいことが明確になってきたと感じております。誰もがずっとその人らしくいられるために美術館という場があって、アート・美術ということの、私たちがやっていきたいんだなと。澁谷「みんなのキンビ」プロジェクトの相談をいただいたとき、自分は不勉強でした。今も不勉強。障がい、認知症、全然わからなくて。いろんな方に美術館に足を運んでもらうためのデザインというところで、正直悩んだんですよ。

簡単に言うと、みんながもっと自由にたたくめる場所、子どもはうるさくしちゃうで連れて行けないみたいなこととか、美術館で声を出して踊ったりなんか、タブーな感じがするけど、もっと開かれていくべきだろうと。そう思ったときに、「みんなのキンビ」プロジェクトというプロ

ジェクト名は、やさし過ぎるっていう話を、最初の打ち合わせ時にしました。

「みんなの」ってすごい使いやすい言葉。「みんなのための」とか言っても実感がない。もっと入り口の言葉、テーマのデザインが必要なんじゃないかっていうので、2023年度は「テーマを『大根』」にしたんですけど、そこがたぶんひとつ大きなデザイン。そしたらね、いろんな方が関わっているプロジェクトなので、「美術館で『大根』って何できんだ？」ってい



「みんなのキンビ」プロジェクト
『大根ビネーション展』

写真：鄭伽郎（小宇宙感光）



*24

うハレーションが起きるわけです。でもこのハレーションにこそ価値がある。北島さんは、私といるんな方の関係で板挟みになって泣きそうになってたんですけど（笑）。

秋田といえばいぶりがっこだったり、大根というものはとても身近なもので、みんな何気なく畑で見ている。そんなごくごく秋田では普通のを、美術館という入り口となるテーマにする。美術館というすごく敷居が高そうな場所と、僕らが暮らしているなかで、すごく身近なものを掛け合わせるといってデザインだったんです。

展示会のオープニングはスーツを着て TeePカッターをよくやるけど、そんなことやってもしようがない。地元の小学生に肥料袋で大根を事前に育ててもらって、それを引っっこ抜くっていうセレモニーをしたんですよ、みんな。県の偉い方も一緒に（笑）。*24

柳澤「北島さんは、今回なぜデザイナーである澁谷さんに依頼したんですか？」

北島「デザイナーという点、印刷物とか、そういうものをデザインするイメージがあるじゃないですか。でも、澁谷さんは、紙とかだけでなく、もっと、コトを生み出していくデザイナーさんで、しかも美術館のある秋田県の県南に住んでいるデザイナーさんということで、何か一緒にできないかなと思ったのが、お声がけさせていただいたきっかけです。」

柳澤「そもそも澁谷さんとのご縁は何だったんですか？」

澁谷「僕がこれからの秋田県立近代美術館をどうしていくかなどを議論する協議委員のメンバーとして、2年くらい関わっていたという関係はありましたね。デザイナーとしてもでしたけど、近代美術館のある横手市の隣の町に普通に住んでいる生活者として、「壁が汚ねえ」とか、「入口ゲートがウェルカムになっていない、あんな美術館に行きたくない」って、正直に意見をしてみましたね。」

柳澤「「大根」がテーマの美術展って、聞いたことないじゃないですか。北島さんは行政で働かれるなかで、澁谷さんから

の無理難題をどうやって上司に説明していったんですか？」

北島「澁谷さんの事務所で、誰にとっても身近な大根のように、親しみやすい美術館にしようとか、大根って大きな根っこって書くから、自分たちの根っこ部分を大きく育てるような展覧会にしようっていうことで、大変盛り上がり、美術館に戻ったんですけど、上司からは「ちょっと考えればわかるよね……」って感じで、撃沈……。」

それを澁谷さんに言ったら、「何の議論もしないでできない」という美術館とは一緒に仕事はできません」と言われました。



プロジェクト2年目、2024年度のテーマは「笑い」。さまざまな感情を含んだ「笑い」をテーマにした全16コンテンツの鑑賞コーナーがデザインされた。



写真：伊藤隆宗（イトウタカムネ写真事務所）



澁谷「「ちょっと考えればわかるだろう」って処理してしまうのは、何も考えていない。」

北島「公の施設では一般的に、私個人も含め、ある程度価値の決まったもの、認められたものを大切にします。」

もちろん大切であるという前提で、何が起るかわからない、予測不能と言われているこれからの時代においては、どこかにある答えを探す、というのではなく、デザイナーや障がいのある方、多様な方と協働し、答え自体を生み出していくという姿勢に意識を変えていく必要があると思います。」



秋田公立美術大学との連携で製作された、巨大な大根の作品。手で触れることができる作品として人気だった。



東京農業大学の名物「大根踊り」を美術館内で踊ることができるコーナーが設けられた。



展示会開催期間中に、美術館の広いホールで、絵の具まみれになって、作家と一緒に思う存分に絵を描く子どもたち。



従来の美術館であればタブーとされる取り組みが数多く実験的に行われた。

写真：鄭伽那（小宇宙感光）

「福島県いわき市」と
「高木デザイン事務所」の共創事例



猪狩 僚さん（福島県いわき市職員）



高木 由之助（高木デザイン事務所）



「igoku」キャラクターの「いごくん」

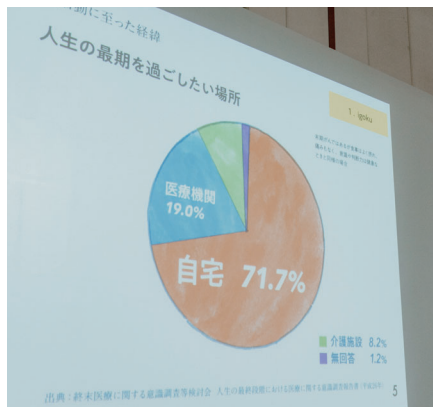
igoku

福島県いわき市地域包括ケア推進課が運営するメディア。フリーマガジンやウェブマガジン、イベントなどを通じ、死をタブー視せずに伝える。2016年にスタートした事業。「いごく」はいわき市の方言で「動く」を意味する。

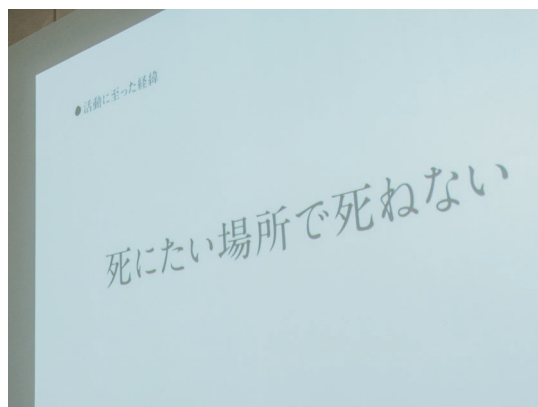
【猪狩 僚】福島県いわき市生まれ。大学卒業後、1年間のブラジル留学を経て、2002年にいわき市役所。2017年に立ち上げた「いわきの地域包括ケアigoku」で2019年グッドデザイン金賞及びファイナリスト5位。2021年にはigokuの活動をまとめたigoku本を出版。現在は、医療対策課。

クライアントの
夢中な想いが大事。
そのうえで
クリエイターの力を借りる

猪狩「igoku」というプロジェクトを、高木さんと一緒にやっていました。この円グラフは「死ぬときどこで死にたいですか?」という、昔のアンケートですけれども、7割ぐらいの人が、「家がいいな」と答えています。厚生労働省ですべての市町村で、家で死んだ人の割合っていうのを出してまして、全国平均が12.8%、いわきが10%。多けりゃいいってわけで



もないんですけど、低い。7割ぐらいが家がいいなと答えているのに1割ぐらい。で、マザーテレサの言葉に出会って、「人生の99%が不幸だったとしても、最後の1%が幸せなら、その人の人生は幸せなものに変わる」という言葉があります。福祉の部署に行ったときに、これ逆だったら最悪じゃんと思ったわけですよ。人生の99%めっちゃめっちゃ幸せ。東北で暮らし、仲間に恵まれ、素敵なデザイ



ナーと出会い、いい暮らしを楽しんでも、最後の1%が不幸だったり、自分の希望通りじゃなかったら、マザーテレサの言葉を信じるなら99%のハピネスがひっくり返っちゃうぐらい、最後の1%ってすごい大事なのかなって。乱暴に言うけど、死にたい場所で死ねないよね。なんで死ねないんだろう? と当時思ったんですね。「人生の最後、どこでどう過ごしたいですか?」っていうのは、考えたくないし、仮に考えたとしても、

どのタイミングで大事な家族にそれを言うんだと。お父さん、縁起でもないこと言わないでという強烈なタブーが横たわっている。²⁰igokuは2016年にスタートしたプロジェクトです。東北のみならず、いわきは高年齢者のみなさんを、愛と尊敬を込めて「じじい」と「ばばあ」と言います。それは方言の違いです。僕が口が悪いわけではない。文化と方言の違いなので、口が悪いとかは言わないで。

一同一笑

猪狩一で、当時のいわきのじじいとばばあは、今ほどスマホをお持ちでもなかった。自宅で過ごせるって情報も知らなかったんですよ。病気になるたら入院するもんだ、介護が必要になったら施設に入るもんだというふうに思っていたので、こちら辺が課題かなと思えました。なので、医療や介護のことをもう少し伝えていかないとけないし、役所がやるにはめっちゃめっちゃタブーとか、おっかなかったですけど、市



民の99%のハビネスをひっくり返されては、いわき市の職員として何をやっているのかという話なので、人生で大事なことから、老いとか死を考えたり話したりできるようないわきにしていこうと思ってる。²¹igokuというプロジェクト、いわきの方言で「動く」。膝が痛くていごがねえみたいだね、そういう動く。というプロジェクトを立ち上げようとなりました。デザイナー、クリエイターとのつき合い方というお題ですけど、そもそもクライアント側の力量とか、想っているのは

超大事なんじゃないかなと。自分がクライアントのくせに言っている。igokuについての説明ですが、フリーペーパーの創刊号は「やっぱ、家(うち)で死にたえな!」、第2号「死んでみた!」。第4号はもう実際死んでるという。役所発行のフリーペーパーで、死にすぎだよっていう。

公園と劇場で2日間にわたって、老いと死が体験できるエンタメ要素たっぷり「いごくフェス」²⁵もやりました。どうしてこんな面倒くさいことをやったのか

という、乗り越えたい課題は死のタブーなので、フリーペーパーや美しいグラフィックの写真の情報やウェブだけでは弱くて、体とか五感にまで訴えないとタブーを乗り越えられないかなと思っただけです。頭ではわかってるけど、やっぱり私は向き合いたくない。だけど、謎に公園で棺桶が置いてあって、地元のビールがあり、飯があり、音楽があり、友達と行ってみたら酔っ払ってきて、ノリで棺桶に入ってしまった。入ってみたら意外と嫌じゃない自分がいたみたい。こんなフェスをやって、グッドデザイン金賞をいただいた。僕はたぶん、役所のなかで浮いているんですが。別に浮こうと思ってるわけじゃなくて、頭のなかの優先順位が、何のために、誰のために、どういう社会にしたいんだらうから始



まっています。役所は「How & What」何をやる? 何をどうやる? 予算がどう? となりがちです。猪狩と東北経済産業局は、何のために、誰のためにから

きな挫折をしています。東日本大震災のいわき最大の被災地の復興で、学校が津波を受けたけど残っていた。3月11日の午前中がこの学校の卒業式で、誰も亡くならなかった人はいない。で、この町はもう家がほぼないので、この中学校だけが昔の記憶の縁になる。ここを震災メモリアル施設にしよう。だけれども、住民のなかでは、1日でも早く壊してくれと、これがあると出さず、かたや残したいっていう人と意見が分かれて。非公式なんです。その地域のなかだけの投票が行われて。僕は残したい派だったんですが、結果壊すということになり、壊し

始まっていくっていう部分は、すごく大事にしているんです。

一同一笑

猪狩igokuをやる前の部署で、僕は

て、今はないんです。このときに職場の上司に、お前が10年後、20年後、この地域にこの校舎が残っていることが、この地域の記憶や復興に



*26
グッドデザイン金賞を受賞したigokuチームのメンバー

いうことで、猪狩さんと僕らのチームができたということですが、猪狩一デザインにこれから僕たち行政がどれだけ頼りにしているのかというお話もさせてもらって終わりたいと思うんですが、igoku最大のヒット作は、第5号「認知症解放宣言」という認知症特集でした。認知症って大変な問題なので、何をお前らが解放できるんだという話なんで



*28



ですが、解放するのは認知症の症状やご本人の生きづらさではなくて、僕たちは認知症の人なんていないのに、認知症の人っていうふうには括ってしまう。認知症ってなったら終わりだね、大変だよって偏見のステレオタイプをはめてしまう。お一人おひとり違うのに。そういう僕の偏見のメガネを外しますという解放宣言。自分に向けている。だからこのおばあちゃんに初めから同じ写真なのに、偏見のメガネをかけていた表紙では曇っている。でも中面では、向こうが現れたんじゃない、僕らの曇ったメガネが外れたので現れたという設えになってるんですが、僕たち福島は、13、14年前に一度ひと括りにされたよね。カタカナで言うフクシマとか、被災者、原発などなど。いわきよりもっと大変な地域があるのに、僕たちはもうまるっと括られて、そのときに居心地の悪さがあったんです。みんな一人ひとり、被災の状況は違うし、もっと大変な人がいるのに括られちゃう、乱暴に括られちゃう。そのとき、俺らちよつと嫌な思いしたじゃないって。だからこの福島県いわき市から認知症を括るっていうのをやめませんか？ ということを、

とってどれだけ大事だったのかという想いを共有できていなかったんじゃないの？ って言われたわけです。確かに僕は当時、クリエイティブのクの字も知らないし、絵を描いたりする力もないので、本当に大事なことや複雑な課題には、役所の自分の力だけではビジョンやイメージを共有するっていうことができないんだなという挫折を経験して、挫折を経てigokuの部署に行ったので、クリエイティブな力を借りようと思って、igokuが立ち上がります。

で、大麥酒が好きでして、毎晩スーパーでかまぼこを買ってお酒を飲むと。そこで先ほど高木さんのかまぼこのデザインに出会い、いわきじゃ知られてる老舗のかまぼこ屋なので、電話をしまして、「おたくの製品をこよなく愛しているけれども、らしくないんじゃないですか？」とね。「オシヤレすぎやしませんか？」と。そして、「うちの高木という社員が作っている」ということで高木さんを紹介してもらい、僕が高木さんに初めて電話する。それで4時間話した話。

高木一「そうですね。突然、この方(猪狩さん)から連絡が来て、いわき市の高齢福祉の

課だと。で、いわき市の現状と課題を3〜4時間延々と語ってくれました。

猪狩一「デザイナーにヒアリング力なんていらないんです。狂ったクライアントは勝手に話します。」

高木一「聞きまくって、聞きまくって、何すればいいんだろう？ ってなりました。猪狩一僕は何も知らないで、こんなかまぼこ屋のパッケージを作れるやつと出会ったんで、もう全部解決。何にも知らなかったから。でも打ち合わせしたら、高木さんが言うわけ。「誰がキャッチコピー書くんですか？」とか、「誰が写真撮



*27

るんですか？」とか。「え、できないから頼んでるんだからお前じゃないの？」と思ったの。

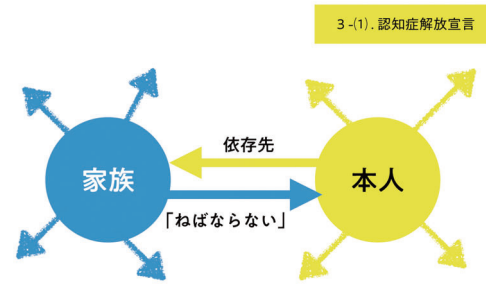
高木一「そうですね。僕はデザインしかできませんよって言ったら、「え、全部できないの？」っていう話になって、いや、それはそうですねって言って。で、文章を書く友達、印刷所の知り合いの友達、映像撮る友達……、友達しかいない。と



特集の最後に書きました。

それから、母ちゃんが認知症になったら、娘の私がんばって世話をしなければいけないって思い込むんです。そうすると母と娘、お互い矢印が一個ずつしかないの疲れちゃう。だけど私は娘だから、私もケアする。でも私は私の時間ほしいから、いろんな人に助けて、手伝ってって矢印を増やすっていうことが、すごく大事なことだと思っています。

認知症の人っていう偏見を外すっていうことと、私が面倒を見なければとか、



- ①本人も家族も依存先を増やすより自立的
- ②「こうでなければいけない」からの解放!

3-(1). 認知症解放宣言

インドと日本の似て非なる言い回し

日本 ひとさま
「他人様に迷惑をかけてはいけない」

インド
「人は他人に迷惑をかけずには生きていけない。だから、他人には優しくしなさい。寛容でありなさい。」

解放・OPEN・ヒラク

資料データ提供：猪狩徹

いろいろなここにいらっしゃるような、みなさんの力を借りて、課題解決っていうよりも、こういう社会にしていきませんか？ という開かれた状態っていうのがすごく大事だし、僕はこれからもみなさんの力を借りながら、少しでもよりよい社会にしていきたいなと思っております。柳澤一会場からの質問で、「OPENの発行に当たって、実際の市民の反応はいかがでしたか？ 発行を続けていて、その反応に変化はありましたか？」と。役場の場合、単年度で事業の評価をするときに、何をどう評価し、どう続けられたのかっていうのをうかがいたいです。

猪狩一僕がいた部署が地域包括ケア推進課という部署なんですけど、地域包括ケアって聞いたことがあるとか、中身を知ってるよっていう人、会場にどれぐらいいらっしゃいます？

《手を挙げたのが数名》

はい、こういうことなんです。僕ですらわかんないですよ。それで集会所のそばあのとこに行つて名刺渡すと、「なんだ？ 地域包括ケアって？」と言われるわけです。僕も答えられない。だけど、今は、「地域包括ケアってあれだろう、igokuで

棺桶入るやつだろう」って、全然違うんだけど、ただその認知は取れてるわけで、まずそれだけで、俺は役所としてこの取り組みはいいバリューがあると思つています。

一番大変だったのは役所の中を通すこと。俺はプロジェクトを立ち上げたときに、お医者さんとか介護の勉強会みたいなものにも一年間行きまくってました。

最期、本人は延命治療したくないのに家族が救急車を呼んじゃうんで、病院に運ばれると治療するしかない。けど、「この人治療してほしくないって言ってたんだよね」っていうのを医者は知ってる。だから、死をタブー視しない。人は必ず死ぬんだし、その人の命はその人のものだよっていうことを役所が言ってくると、医療側はすごくありがたいなっていう声もたくさん聞いてたので、役所からこれ(igoku)出せたら、もう何百人が応援してくれるってのは思ってたんです。通すのは大変だったけど、出たら大きい病院の院長が市長にいい取り組みだと伝えてくれた。

柳澤一猪狩さんにとって、想いを市民と共有するっていうことが非常に重要なん



ですかね？

猪狩一俺の想いを共有したいんじゃないやなくて、こういう地域になったらよくねえっすかみたいな想い。さっきの学校を残したいという話も、俺の発案じゃなくて、地域から出てきたんですよ。それを聞いたときに、

確かにもう道も家もすべてが変わってしまう町で、あそこに学校が残ってるから、俺んちはそこらへんだったなみたいな未来を含めてすごく大事なこと。でもやっぱり傷ついている人もいる地域だから難しい。でも乗り越えたいなっていうのがあった。でも乗り越えられなかった。次の部署もさっき言ったみたいに死の問題に関わっている。だから、次こそは自分じゃない力も借りなきゃなと思った。

柳澤一猪狩さんってデザイナーっぽいですよ。すごいなと思うのは、これが課題ですっていうのを明確に言える。こう



なってほしいけど、そうやってないっていうことを見抜ける力がある。それはデザイナーじゃない人がやらなきゃならんんですかね？ どうやってこんなに整理されているのかとか、デザイナーじゃな



んとか「デザイン」してもらいたいと思っています。狭い意味のデザインと広い意味でのデザインが今混同されている。僕からすると、美しいグラフィックとかプロダクトみたいな「狭義の意味のデザイン」と、社会でもっとこうなっ

たらいいよねとか、なんでこんなところがポトルネックになってるの？を、想いも含めて整理して描くような、「広い(広義)意味のデザイン」があると思います。

広義のデザインのプロセスとして対話、まさに高木さんに僕が4時間話したようなこと。研ぎ澄まされた言葉だったら、そんな4時間もかからないじゃないですか。僕がバーって言ったのを、整理してくれたら、猪狩さんのやりたいこととか想いって、こういうことなんですか？ って順番を並べ替えてくれたり、俺の頭のフレームを整理してくれるっていうのが、すごく大きかったと思うんです。

で、もうひとつは、そのパッションとか、

人はどうがんばればいいんだろうっていうのを、思ったことがあれば、ぜひ伺いたいです。
猪狩「デザイナー」っていう言葉は、まさにデザイナーのみなさんに、これからの

う言葉があるらしくて。がんばってない

わけですよ。ただやりたい。夢中だから。だから夢中になるっていうのはめっちゃ大事かもしれない。パッションかと言われると、ちょっと違うかもです。もうやりたくてやってるし、おもしろくて行ってるんで。だから大事なことは、おもしろがるんとか、夢中になるってことかもしれない。

あとは、高木さんみたいな人がいるんで。わーって話す(笑)。



がんばるとかは、あんまり自分では思っなくて、ただただめっちゃくちやおもしろかったんです。このばばあちを世に知らせたい。ばばあちが作ったおひたしのうまさ世の人にお届けしたい。肩組んで踊ってみんなで飯食って帰るみたいな暮らし。なんだこいつらサイコーじゃねえかみたいな。このおもしろがるって



地域とデザイナーが共創する きっかけとなる場の事例



佐藤太一さん（空白実習室 管理人）

デザイナーが、地域のプレーヤーと共創するためには、両者が会える場も必要。2024年度の『東北デ、』公開デザイン討論会では、宮城県角田市にある「空白実習室」の管理人・佐藤太一さんに登壇してもらい、どんな活動が行われているのかご紹介いただきました。



横塚明日美



面川常義さん（角田市市民 | 急遽、登壇！）

空白実習室とは？

宮城県角田市にあるオルタナティブスペース。居酒屋だった空き店舗を活用し、2019年にオープンした。誰もが自由に自分を表現でき、集まった人々と共有できる場所を目指し、アートの展示会や音楽イベントなどが開催されている。

【佐藤太一】宮城県角田市生まれ。実家の不動産業を営みながら、フリースペース「空白実習室」の管理人を担い、音楽、アート、サブカル好きが集い、イベントや創作活動を通じて、誰もが自由に表現できる場所を目指す。2013年には、「角田妄想会議」を友人と立ち上げ、地域の「まちあそび」を妄想中。

本当の自分みたいなところ を表現できるような場所

佐藤「角田市で不動産屋をやりながら「空白実習室」というフリースペースを運営しています、佐藤と申します。昔ながらの地元の集まりが苦手で、代わりにひとり活動しているような感じでした。おもに飲み会をやったり、展示をやったり。「空白実習室」以外でも、角田市内でフェスを企画したりしています。

小池さんとも接点があって、小池さんの知り合いの方が福島で開催されていた上映会に遊びに行っただけです。それで「角田でもこんなイベントをやりたい」と思っ、角田にお呼びしたことがきっかけで、相互交流が始まりました。

小池「5年ぶりに開催されたFORS座 REST2015」[P66]のスタッフにもなってくれて。私も角田のフェスに遊びに行ったりとか、出展したりもしています。澁谷「空白実習室」って、こういう無目的な空間なんだけど、人が集まる空間って、もともと角田にはあったんですか？佐藤「そういうのがなくて。町で何かやると、「まちづくり」とか「地域おこし」



みたいなの、ちょっと大きいフレームなんです。そこにはあんまりおもしろさを感じなくて、なんかもう少し、一人ひとりの個別の個性だったりとか、趣味だったりとか、そういうものが表現できる場所がほしかったなっていう感じですね。不動産は家業なので、そんなに好きではなくて。だからそれ以外の活動をしたいなと思ってはいたんですが、いろいろなイベントをしている間に、不動産ってこう

いう場を作ることができるとなってきた。うのがわかってきました。

澁谷「一場のデザインですか？」

佐藤「そうなんですかね。生きてる場所がいいんですよ。結構最近、自分がいなくても誰かがまわしてくれていたりするんです。だから場所が少しずつ育ってるとなりたいな、そんな感覚があるんですけども。「空白」みたいなものを埋める場所というか、本当はこういう生き方じゃないんだけど、こういうふうにするまわなきゃいけないとか、言えないことがあるとか、そういう本当の自分みたいなところも表現できるような場所として、開いていたらみたいなことは、思っ管理しているというような感覚です。

《ここで突然、面川常義さんが登壇！》





面川「会場からすみません。少し補足させていただきます。太一さんと一緒に活動している面川と申します。」

僕と太一くんは同級生なんですけど、もうひとり同級生がいて、彼から「妄想会議」というのをやっているのに参加しないかと誘われて。それから3人で集まって、普段言えないようなモヤモヤしていることとか、自分は東京からUターンしたんですが、地元帰ってきたら、「何

もねえじゃねえか。でも何かやりたい想いはあるよね」っていうことを、飲みながら話す機会をもっていたんです。そこから「空白実習室」という場所が生まれたんですが、田舎なので、人に会わないんですよ。僕は農家をやっている、地元のじいさん、ばあさん、近隣の農家さんとは会えるんですけど、町場の人に出会うきっかけがない。だから、会って話したいんです。



柳澤「佐藤さんはデザイナーさんではないんですよね？ デザイナーさんとはどういう取り組みをされているのでしょうか？」

横塚「佐藤さんと面川さんの同級生で、先ほど「妄想会議」を一緒にやっていたと言っていた方が、角田市の生涯学習課に勤めていて、「かく大学」という地域大学を町の事業で運営してるんですけど。生涯学習って、結構子どものことと高齢の方のことはやってるけど、真ん中の、30代から50代ぐらいの働いている人たちのことは抜け落ちてるんです。だから、本来の姿に戻して行く方がいいんじゃないかと、みんなで楽しく学べる、「かく大学」っていうものを作りたいから、ポスターとチラシを作ってたほうがいいっていうオーダーをいただいて、今では企画の話もさせてもらっています。」

佐藤さんとは、直接デザインの仕事をしているわけではないのですが、この「かく大学」のきっかけになった妄想会議をしていたひとりが佐藤さんでした。柳澤「会場から、なんとなくいろんな業種の人が集まれる場所って大事で、何気ない会話から商品やイベントが生まれる



『瞬祭』
染色家・山崎広樹さんによるインスタレーションと即興でつくるお祭りを行った。山崎さんは神奈川県川崎市にある草木工房の4代目にあたる。

こともあるし、垣根を越える場は確実にイノベーションが起こる場所でもあると思います」というコメントをいただいています。デザイナーの方が地域と繋がるときに、「空白実習室」のような場所は大事かなって思うんですが、デザイナーさちと出会って思うんですか？」

面川「飲み会って言ってしまうと軽率に

聞こえるかもしれないのですが、特定の目的がないと自由に過ごせる場所って意外と少ないと思って。カフェひとつとっても、ある属性の人にとって過ごしやすい場所で、実は同じような属性の人しか集まっていけないと思うんですよ。でも「空白実習室」という場所は、目的がない場所で、どんな属性の人もいていいので、デザイナーもいれば行政の人



『石黒潤小作品展』
角田市にUターンしたグラフィックデザイナーの石黒潤さん（「空白実習室」によく遊びに来られるそう）が、コロナ禍から描き始めた膨大なドローイング集を企画展として公開。

もいけば、子どももいるんです。年末に忘年会（大某年会）を毎年開催してるんですけど、12時間やって、ずっといういい。そういう場所って、家以外にはほとんどなくて、貴重だと思うんです。」



『大某年会』



Topic③
公開デザイン
討論会を終えての
考察

『東北デ、』



日本海篇 青森・秋田・山形

誰もがデザイナーと
協働する社会へ

Sea of Japan Chapter

日本海、鈍より鉛色の空の下、
縄文の香り漂う青森・秋田・山形の百姓デザイナーが、
ガングロバラバラ、県境またいで、
反復横跳びしながら、秋田の地でせめぎ合い、
いよいよそのデザインの思考と妄想は、
雪解けと共に、解凍し、崩壊す。

執筆：柳澤 龍（合同会社 運動）

東京都出身。東京大学大学院を卒業後、IT企業に入社。2014年に秋田県五城目町へ移住し、地域おこし協力隊に着任。町内の土着企業・個人が集まり、一般社団法人ドチャベンジャーズを設立。廃校オフィス“BABAMEBASE”の指定管理を担いながら、社会の変化を後押しする運動に励む。

一つのデザインの実践が 組織を変える

デザイナーとの協働を後押しするのは難しい。仕事でデザインを取り入れる業種には限りがあるし、限られた予算でやりくりしていたときに、新たにデザイナーに仕事を頼むにはきつかけが必要になる。デザイナーが仕事にもたらす可能性を理解し、デザイナーとの協働を広げていくためにはどうしたら良いか？ という問いに、日本海篇では大きな示唆があった。

金山町役場の丹氏と吉野敏充デザイナー事務所との吉野氏は、地域でのマルシェの開催や東京での物産展への展示参加など事業と共に取り組んできた。役場職員の立場として、事業内にデザイン費用を含めた予算獲得は、熱意を持って説明をしても、何年も実現しなかった。晴れて予算獲得ができ、事業を形にしていくなかで、役場内でデザイナーと協働する風景は、周りには新鮮に映るのかもしれない。課題を整理し、ユーザー目線で捉え、わかりやすく伝える過程も含め形にするデザインの仕事は、一般的な印刷物の制

作というデザインとは異なる。このような取組が役場内で共有され、身近に過程を見るなかで、デザイナーとの仕事の進め方、発注の仕方、協業の仕方に対する解像度が高まってゆく。そして、結果として現れるデザイナーと協働した事業成果が、課題の本質を捉えているからこそ効果的なものになる。デザインの価値を身近で感じた結果、役場内の同僚たちがデザイナーと協働するようになってゆく。

デザインリテラシーの向上の方法には多様な手段があるなかで、役場内でのベスト・プラクティスから職員とデザイナーとの協働が進むには幾つかの段階がある。デザイナーとの協働を間近にみる。今度はデザイナーの作業に参加してみる。そして、今度は自らデザインに関わる作業をしてみる。すると、デザイナーへの発注の仕方が変わる。そして、事業とデザイナーの関わり方が多様化していく。このような段階を経て、デザインリテラシーの高まりとともに、より事業の価値も高めていけるはず。なにか特別な講義や講座を受けるだけでなく、身近にある良い事例から伝播できるかもしれない。

伝播させるのは、デザイナーではないほうが多様な人に伝わる。青森市の豊川氏と教育委員会の方による歴史民俗資料館での観光制作物の一連の制作からはじまり、近隣自治体と連携して豊川氏と制作物を協働した事例がある。良いデザインは、人を繋ぐ可能性をもっている。

誰もがデザイナーになる社会へ

デザインを特別なものではなく、誰もがデザイナーになる社会が実現するとき、きっと誰もが作ることが身近な状況になっているはず。デザイナー的視点を踏まえた取り組みを誰もができるように。たとき、課題に取り組む誰もがデザイナーと良い協働をしているはず。その社会の実現は、身近にデザイナーとの協働を感じ、自ら作ることに関わることから始まる。秋田市のギャラリー・コラポラトリー代表の後藤氏は「人口がどんどん減っていても、一人ひとりの創造性が上がれば、未来はそんなに悲しいものではないと思うんです」と語るように、誰もがデザイナーと共に作れるとき、誰もが希望を創造できるはずだ。

Topic③
公開デザイン
討論会を終えての
考察

『東北デ、』



太平洋篇 岩手・宮城・福島

デザインと出会い、
共に学ぶ

執筆：柳澤 龍（合同会社 運動）

Pacific Ocean Chapter

太平洋、眩くビーチサンダルの空の下、
イーハトーブな香り漂う岩手・宮城・福島の野良デザイナーが、
ししに、すずめに、やっつき踊りで、仙台の地にせめぎ合い、
いよいよそのデザインの思考と妄想は、
波の音にまぎれ、砕かれ、打ち消さる。

作る・表現する空間と場が
デザインを身近にする

デザイナーとノンデザイナーの協働を
推し進めるために、デザインリテラシー
を身につけるのが大事な手段になる。デ
ザインを学ぶには、デザイナーと出会い、
交流するのがデザインリテラシーを身に
つける一番の方法である。しかし、デザ
イナーの知り合いがない、出会う機会
がないとき、どんな方法があるだろうか？
1つの手段が、地域に空間・場を作るこ
ともかもしれない。

登壇した小池氏、西山氏、横塚氏がク
ライアントと出会ったのは、デザイナー
とのマッチングイベントや事務所ではな
い。小池氏は東日本大震災から復興に向
けたイベントで企画者や参加者と交流す
るなかで出会った。西山氏はデザインや
クリエイティブを身近にする「表現」か
らつながる家「粒粒」として、自らの事
務所を開放し、誰もがアクセスできるよ
うにしている。横塚氏は角田市で不動産
事業を手掛ける佐藤氏が切り盛りする
アートの展示会や音楽イベントができる
スペース「空白実習室」に出入りするな

かで御縁が繋がっていった。

3人に共通するのは、多様な方々が集
まる空間・場があって、誰もが作る・表
現に触れる機会になっていくこと。デザ
インの土台となる「作る・表現する」空
間があることで、デザイナーが活動でき
る場所となり、自然と地域とデザインを
身近にしていく。角田の「空白実習室」
には、行政職員も継続的に出入りするな
かで、出会う、学んで、つながる。市
民の学び場「かく大書」がはじまり、横
塚氏はクリエイティブを担当している。
1つの場があることで、人と人を繋ぎ、
デザイナーリテラシーが育まれていること
を示している。

学び方は「一緒に作る姿勢」

デザインを学んだことがない人が、い
ざ仕事でデザイナーと関わるとき、どう
したら良いのか？ 職場でデザインリテ
ラシー研修があるわけでもない。そんな
一歩目について岩手のスズキ氏は「デザ
イナーからクライアントにしてほしいこ
と」を示唆してくれた。

例えば、りんごジュースのパッケージ

をデザイナーへ依頼して制作してもら
とする。依頼側からすれば、一言伝えれば、
あとはデザイナーが作ってくれればと疑っ
てやまない。しかし、デザイナーが機能す
るためには、デザイナーとクライアント
が互いに学びあい、取り組む内容に対
して問いを立て、壁打ちをしあうことが必
要になる。任せておしまいではないのだ。
クライアントは「デザインを学び」、デ
ザイナーは「クライアントの経営を学ぶ」
という、相互の関係性が必要なのだ。専
門性が異なるからこそ、お互いの共通言
語を育むためのプロセスが、良いデザイ
ンが生まれる上で、不可欠となる。

日本海篇では、デザインする過程に参
加することで、デザインリテラシーが身
になった事例が話題になった。ここでも、
デザイナーと共に作る感覚を持って、デ
ザイナーと学びあい、互いにより良い変
化へ向かう対話をする。目先の売上
だけでなく、腰を据えて、クライアント
が商品を通して描く未来に向け、デザイ
ナーは問いを立て、長い意味での納得が
相互に生まれるとき、それは良いデザイ
ンになっているはず。

TOHOKU IDE, SIGN
TOHOKU IDE, SIGN
TOHOKU IDE, SIGN
TOHOKU IDE, SIGN

東北、
東北で、
デザインする
ということ。

東北、
東北で、
デザインする
ということ。

「デザイン百姓」

鈍臭いけど、あつたかい。適度にアホで、程々マジメ。

日本海篇

青森・秋田・山形
日本海篇

2025.1.26 [日]
@秋田市文化創造館 1F
秋田県秋田市千秋町徳町3-16
【参加費】12:30-14:00 定価12:00
【参加費】14:15-16:00 定価14:00

デザイン討論会

公開デザイン討論会のお申込先
以下の情報を記載し、メールにてお申し込みください
メール件名：東北デ、申込み(日本海 or 太平洋)
記載内容：所属・役職、氏名、電話番号、メールアドレス
メール送信先：bz1-thk-kikaku@moti.go.jp

2025

宮城県仙台市
【参加費】12:30-14:00 定価12:00
【参加費】14:15-16:00 定価14:00

青森・秋田・山形
日本海篇

2025.1.26 [日]
@秋田市文化創造館 1F
秋田県秋田市千秋町徳町3-16
【参加費】12:30-14:00 定価12:00
【参加費】14:15-16:00 定価14:00

デザイン討論会

公開デザイン討論会のお申込先
以下の情報を記載し、メールにてお申し込みください
メール件名：東北デ、申込み(日本海 or 太平洋)
記載内容：所属・役職、氏名、電話番号、メールアドレス
メール送信先：bz1-thk-kikaku@moti.go.jp

2025.2.22 [土]
@STUDIO080
宮城県仙台市宮城野区若竹3-1-6
【参加費】12:30-14:00 定価12:00
【参加費】14:15-16:00 定価14:00

太平洋篇
岩手・宮城・福島

阿部拓也 [岩手]
スズケンイチ [岩手]
横塚明日美 [宮城]
伊藤典博 [宮城]
高木市之助 [福島]
西山里佳 [福島]
小池晶子 [福島]

鈍臭いけど、あつたかい。
適度にアホで、
程々マジメ。

デザインは言葉

澁谷和之(澁谷デザイン事務所)

ふと気づけば、『東北デ、』という旅は、5年という月日を経て、すっかり想像よりも「遠い」ところまで来てしまっていたのではないかと……と、今この一冊をカタチにしながら感じている自分がいる。

ここでいう「遠い」とは、思いのほか、大袈裟になってしまったなあとか、頭でっかちになってしまっただけか、頭でっか、一丁前に「デザイナー」を気取って、身の丈に合っていない領域のことまで、物申しているのではないかと……というような色々な感情を含んだ「遠い」である。と言いつつ、あと少しだけ、僕のデザインに対する「言葉(あしがき)」にお付き合いいただきたい。

「デザインとは、「言葉」にすること」。これは、僕がデザインに向き合う上で、大事にしたいと思っている「姿勢」である。

長年、福音館書店から発刊されてきた、

『母の友』という生活文化雑誌があるが、2025年の3月号をもって、休刊となったことをご存知の方も多いかと思う。そんな『母の友』3月号の冒頭に書かれていた「言葉」が印象的だった。

——創刊編集長の松居直は「生きる」ということを皆さんと共に考え抜きたいと思つてこの雑誌を創刊しました」とよく話していました。でも、「生きる」ってなに？ 最後までこのテーマについて皆さんと一緒に考えることができたら幸いです。考える、ということ。ひとりで頭の中に言葉を連ね、組み立ていくことも「考える」です。同時に誰かと言葉を交わし、共に言葉を積んでいくことも「考える」なのだと思います。自分の中にはなかった新しい言葉と出会えば、世界も広がる。それは、きつと、より良く暮らす可能性も広がってくれるように思います——

僕には、この『母の友』からの「言葉」が、「デザイン」のことを語っているように思えて、すこぶるうれしくなった。

「デザインする」という行為に向き合っていると、僕は必ずと言っていいほど、

そこに正直で、素直な、強度のある「言葉」を探し求めていることに気づく。一般的に、デザインには「絵・ビジュアル」のイメージがあるが、そうではなく、やさしく、広く、強く、届く「言葉」だ。

つらい、地獄、寂しい、地味、アホ、無駄、孤島、線引き、制限、野良、敗北、終わり、不便、弱さ、隙、潰れた家、大根、あきらめる、死、老い、空白……

ここに並べた一つひとつは、今回の『東北デ、』という研鑽の場に出会った「言葉」たちだ。どこか華やかなイメージのする「デザイン」の業界とは、縁遠い印象のある「言葉」の数々。とても暗いし、重い。しかし、決して明るくない、これらの「言葉」たちに、僕は不快な気持ちになることなど一切なかった。逆に、心地よさや安心感のようなものを感じずにはいられない。『東北』という土地の背景や、気配をしっかりと纏った、静かに、

こんな「言葉」をともに交わしてくれた『東北デ、』のデザイナーたちは、皆どこか、静かな闇をもった佇まいをしつつ

も、独りで楽しく、明るく在る強さや、豊かさを携えているように感じられた。

「独りで、楽しくなる」と書いて「独楽」。「独楽」とは「こま」と読む。そう、あの紐や指先を使って、くるくると回して遊ぶ玩具の「こま」である。

「独り」という「言葉」は、淋しさのニュアンスも含みつつも、本質的にはとても強く、たくましい面をもっている、僕は思う。そこには、限られた環境で培われる、「あきらめ」という強さや、明快さを感じずにはいられない。

『東北』という土地は、冬には深い雪によって、強制的に閉ざされる。真っ白い雪に包まれ、静かに籠る。とにかく開かれていない、閉じている状況。そこには、「個」や「独り」が強制的にセットされる。僕は、ここに、『東北』の「生きる」強さ、そして、「考える」強さの原点があると信じてやまない。ちなみに僕は、「雪害」と呼ばれられ、嫌われがちな、雪が嫌いではない。

秋田を代表する舞踏家・土方巽は、赤子の頃に、「いづめ(または「えんちこ」とも

いう)」の中に入れられ、閉ざされていた記憶から自らを解放することが、自身の舞踏の表現だった……というようなニュアンスのことを、何かで見聞きした記憶がある(あくまで僕の臆げな記憶の話だ)。

独りとか、籠るとか、閉ざされるとか、ネガティブな印象のある状態には、どこか『東北』という地に秘められた、爆発力のあるエネルギーやクリエイティブが眠っているような気がしてならない。

さて、今一度、「言葉」の話に戻る。本書のまえがきでも触れているが、「地域デザイン」「地域デザイナー」などをはじめとし、私たちが理解しているように、理解していないかもしれない、「地域」という「言葉」。この耳障りの良い「言葉」が、昨今デザインの現場では、どこか便利に使われ過ぎてはいないだろうか。

「地域」という「言葉」を、もっと具体的に言語化するとうなるだろうか？ 今回、共に『東北デ、』を伴走してくれた柳澤龍くん(P77)と僕が、ここ5年ほど続けている「教育×デザイン」のプロジェクトがあるのだが、その場に参加してくれていた、ある一人の高校生は、こう定義した。

「私にとっての『地域』とは、行く先々ですれ違う人が、挨拶をし合う関係にある範囲のことだ」と。また、秋田に移住した、ある30代の編集者は、「自分の暮らすエリアの積雪量の凄さを共有したがる秋田県人にとって、雪の量(除雪の苦労の度合い)が自分の暮らす『地域』を認識する基準みたいなものになっているかも」と言う。なるほど、「地域」といっても、様々な言語化の幅があるのだと、感心させられた。

「地域デザイン」「地域デザイナー」、そして、「インタウンデザイナー」という、今後その意味を丁寧に深めていく必要がありそうな「言葉」を目の前にし、われわれ東北のデザイナーは、東北の「言葉」で「考え」、東北らしく「生きる」デザインを築き上げていきたいなと、『東北デ、』という場を通じて学び、振り返っている。

さて、気づけば、また長々と「デザイナー」を気取って、頭でっかちになってしまった……。今一度、身の丈に合った、暮らしに「近い」ところへと意識を置き、静かに淡々と、ごくごく普通に、日々のデザインに励んでいこうと思う。

*2 「国語・算数・理科・デザイン!」。デザインの基本である「観察」という行為を通じて、デザイン的な視点や思考を深める「教育×デザイン」プロジェクト。公式ホームページ <https://akitade.jp>

*1 昭和の頃、農村などで、農作業や家事をする間などに、赤ん坊を入れて子守をするために使われていた藁で編まれた籠のこと。実際に田んぼなどに持ち出し、赤ん坊を入れ、見守りながら農作業をしていた。

続・東北デ、～東北で、デザインするということ～

主催 経済産業省東北経済産業局	Special Thanks
企画・プロジェクトマネジメント 合同会社 運動 澁谷 デザイン事務所	【青森】 山崎杏由さん（野辺地町教育委員会） 神祥二さん（神武食堂） 木村正幸さん（デザイン工房エスパス／IRODORI） クリーニング岡田さん、 ちゃんゆうさん、ヒム子さん（バラバラ team なんこつ）
取材・編集 東北デ、編集部（柳澤龍／佐藤春菜／澁谷和之）	【秋田】 富野昭雄さん（新屋商店会） 田村一さん 武石悦子さん（KAMIプロリスタ実行委員会／ 村食生活改善推進協議会） 北島珠水さん（秋田県立近大美術館 学芸主事）
アートディレクション・デザイン 澁谷和之（澁谷デザイン事務所）	【岩手】 岡田早希さん（あそびば nekkō） 岡田芳美さん（OKD Works） 小田島裕樹さん（成和建設株式会社） 小田島由香利さん（成和建設株式会社） 宮澤健さん（社会福祉法人 悠和会 銀河の里）
写真 東北デ、編集部 伊藤隆宗（イトウタカムネ写真事務所）	【山形】 伊藤隆さん（鶴岡市） 五十嵐茂久さん（関川しな織協働組合） 五十嵐利幸さん（関川自治会） 渡会日菜さん 丹健一郎さん（山形県金山町職員）
カバーイラスト 佐藤美博（職人商売 ミンカ 店主）	【宮城】 三條望さん（公益財団法人仙台市市民文化事業団） 亀田亜蘭さん（合資会社亀兵商店） 嵯峨倫寛さん（Hello Bright） 佐藤太一さん（空白実習室）
取材協力・データ提供 佐々木遊（アソビズ） 豊川茅（トヨカワイラスト研究室） 後藤仁（ココラボラトリー） 阿部拓也（のほら） スズキケンイチ 吉野敏充（吉野敏充デザイン事務所） 富樫シゲトモ（羽越のデザイン企業組合） 横塚明日美（合同会社 nekiwa） 伊藤典博（合同会社スカイスター 仙台青葉学院大学・短期大学） 高木市之助（高木デザイン事務所） 西山里佳（株式会社 marutt） 小池晶子（手作業）	【福島】 西村和貴さん（小西食堂） 氏家利康さん（平澤屋旅館） 安部なかさん（中ノ沢温泉旅館案内所） 藪内義久さん（OPTICAL YABUUCHI） 安齋一寿さん（あんざい果樹園） 安齋久子さん（utsuwa.gallery あんざい） 安齋伸也さん（一般社団法人たべると暮らしの研究所） 猪狩僚さん（福島県いわき市職員）
協力 東北スタンダードマーケット（株式会社 金入）	《東北経済産業局総務企画部企画調査課》 丹野幸樹さん 鈴木晃平さん 清野恵太さん 佐々木優聡さん 矢野悠太さん
Special Mood Maker 伊藤和輝（東北スタンダード） 岩井巽	

*内容の無断転記・記載・複写を禁じます。
*本内容の転売を禁じます。
*本誌データは2025年3月31日現在の情報です。あらかじめご了承ください。